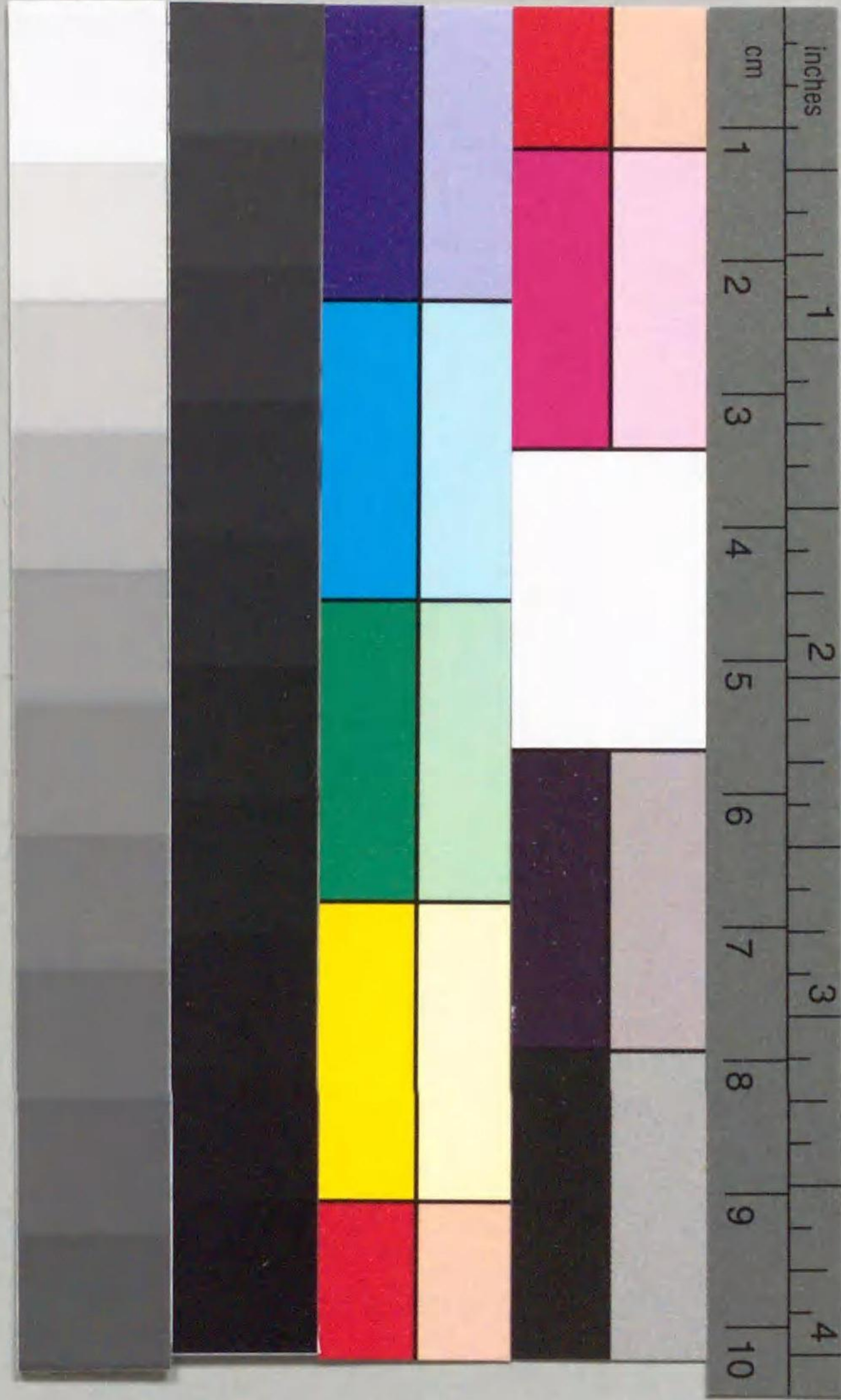


世界名作物語

アクリスの剣





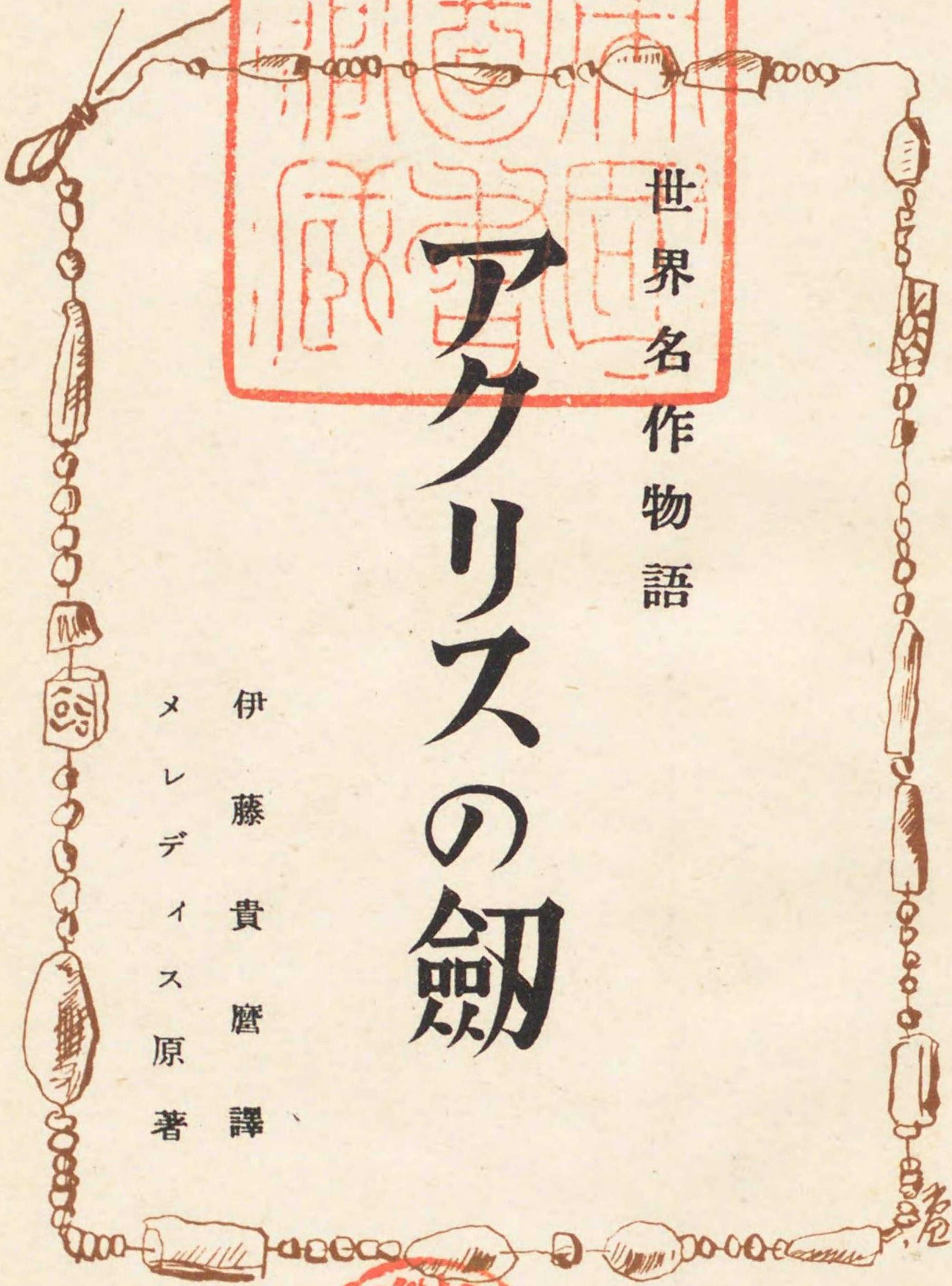
12



世界名作物語

アタリスの劔

伊藤貴磨 譯
メレデイス 原著





は鬼悪 ばれむ攻てつるふを劔の魔降り乘に鳥大がイラブシ
 筆明水元井 すはかを身つせ走つりぐくひ庇をトッパグヤシ

40
 I-1



151823

はしがき

この物語は、ぜんべんまじゆつ全篇魔術とぼうけん冒険との連続からなる、ジョオヂ・メレデイスの "The Shaving of Shagpat" のほんやく翻譯に、多少の手を加へて、少年少女の讀物としたものであります。

私はこれまで、年少者に對する、世界傑作物語などと銘打つたものが、幾度繰返されて出版せられても、常に「ガリヴァー旅行記」であつたり、「アラビヤンナイト」であつたり、「西遊記」等々であつたり、たまに新しい物が出て、内容がおもしろくなかつたり、又は軽々しい映畫の筋書のやうなもので、世界的傑作と云へないものばかりだつたのを、嘆いてゐた者でありましたので、此度本叢書ほんそうしょが刊行せらるゝにあつて、此作を原作に自信をもつてとり上げたのであります。

私がこの作を初めて読みましたのは、二十年近く前で、その稀有けうの名作である事に驚嘆し、其時すでに——これは一寸手を加へれば、立派な少年文學となると思ひ、何れそのうちに、誰か手がける者が現れるだらうと密かに期待してゐましたのですが、一向誰もとり上げる者のないのを、實はじり／＼してゐた次第でしたが、とう／＼今度自分が、菲才をかへりみず、手がけることに立到つたのです。

本書も年少者に與へるには「アラビヤナイト」や「西遊記」同様、多少カットを餘儀なくせられる點はあります。よつて私は、第二章の「美人バナヴァー物語」の大部分を、年少者に對する影響の點から削除し、中程の「魔女ラベスクラットの手管」の一部、その他、餘りに執拗で煩瑣な描寫には、相當手心を加へましたが、これを全體の二十數章から云へば、ほんの一部分に過ぎません。

なほ、あまりに不可思議な世界に、唐突に年少讀者を引きずりこんで、五里霧中ごりむちゆうに陥おちらさせたくないといふ老婆心らうはしんから、前置の一章を附け加へて、古い西洋の芝居に出

て來る、道化どわよろしくの戲言ぎげんを弄ろうして、先づもつて大體の大筋を説明し、あはせて讀者の頤を解いて、愉快に本筋を味つていたゞき度いといふ魂膽こんたんでありましたが、原作者も云つてゐる通り、上品に出來上つた譬喻アレゴリックロマンス文學特有の、既に原作に糖衣が施してあつたのですから、全然の蛇足だそくであつたかもしれせん。

さて、原作者のメレディスと、原作とに就いて極く簡單に一言して置きます。

英國の十九世紀の大半は、御承知のやうに、ヴィクトリヤ女王時代として、文華の燦然さんぜんと輝き出た時代であります。文學界にも多くの巨匠が輩出しました。普通その時代の文壇を、初期、中期、後期と分けますが、メレディスは、その後期の第一人者であります。彼には「自我エゴイストの人」を始め、所謂四大小説の傑作等がありますが、それらにはこゝでは觸れなうこととして、……の「The Shaving of Shagpat」は、彼の日本流に云つて二十九歳（西曆一八五六）の時の、散文としては處女作にあたります。其内容はどうかと云ひますと、舞臺を東洋にとつた點、プロットの進め方等が、餘りに

「アラビヤナイト」に類似した點など、西洋文學としては稀有のもので、作者自身も、初版には——これは東洋の物語の翻譯ではない。——とわざわざ斷つた位であります。で此點、西洋人の創作した一種の「千一夜物語」とも云へます。又、アクリスと云ふ聖境に、アクリスの劍を取りに行く爲めに、道中魔術を戦はし、冒険を敢てして、あらゆる艱難辛苦を経験する點は、西洋西遊記ともいふ事が出来ると思ひます。次に、強ひて文學として類別すれば、スペンサー、バンヤン、スキフトの諸作、外國では、ヴォルテールの「カンディド」「ザディグ」の系統を引く、譬喩物語とか、諷刺文學とか云ふべきものですが、スペンサーやバンヤンの如く、道義をむき出した道學臭味もなく、又、ヴォルテールの作の如く、たゞ社會を冷殺罵殺しようとするやうな、意地悪さもありません。眞に上品で、興趣深く、その空想の奔放さに至つては、實に天馬空を行く概があります。

さて、結局この風變りな作は、何を描かうとしたものであるかといふと、——譬喩

文學ですから色々にとれますが——私一人の考を一言にして述べますと、人類社會には昔から、色々な眞理、哲學、宗教、學說、主義主張、制度が幾度か起りましたが、それらは、最初は起るべくして起つたものでありますが、やがては、無力なものとなり果てるばかりか、終には迷妄となつて、世を毒するに至るものが多いのであります。が、一旦非常な勢で世を風靡したものは、惰性でもつてなか／＼跡を拂ふことが困難で、社會はそれが爲めに愈々硬化し、その毒素に中毒することになります。かういふ場合それを打拂ふには、一個の英雄の出現が必要であり、かくて人類社會は新しく進展しますが、又、數十年なり數百年なり經つと、それが又迷妄となり毒素となつて、次の新しいものを待たねばならんといふことを繰返すことになる。……これを一例を以て説明すれば、歐洲に於けるキリスト教は、當然起るべくして起つたものであります。中世紀になつて墮落し、幾多の人類文化をはばみさへするやうになり、其後段無力なものになつてしまつた事なども、一例としてあてはまると思はれます。然し

てこの作では以上に述べたやうな意味を、アレゴリックに諷刺したものであると斷言してもよいのではないかと思はれます。

しかし、あの「西遊記」が、佛教の信仰を説いたもので、結局有難い經文を求めて樂土に成佛する迄を書いたものでありますが、現象心象の凡てが、飽迄譬喩的に、童話的に描かれてゐるやうに、此の作も又、譬喩的に、童話的に、象徴的に描かれたもので、其の點が、深奥な大人の文學であると同時に、愉快な興趣盡きない少年文學としても、好個なものである所以でありませう。

最後に、メレディスに就いて、もう一言して置きますが、メレディスは、英國文學界を通じての巨匠であります。又世界的文豪であると云つても、敢て過言ではないかと思ひます。夏目漱石氏は、いたく彼に私淑し、英國十九世紀小説壇の最高峰なるチャールズ・ディケンズよりも、彼を高く評價したと云ふことであります。又、この「シャグバット」は、一般文學史家は輕視してゐる傾もあります。決して私一個の

最^{ひい}頂の引き倒しではなく、既に彼と同時代では、ジョオデ・エリオットが、——天才のものした不朽の作であると激賞し、小泉八雲氏は、メレディス亡ぶとも、シャグバット亡びずとさへ云つたとい話があります。私はこの原作を愛好する餘り、私の後に、第二、第三と、より立派に少年文學化せられた、シャグバットの出ることを切望します。

なほ、曾てこの作の話をしました所、是非手がけて見るやうにと、好意ある激勵の言葉を戴いた、前田晁先生に、一言感謝の意を表して、筆を擱くことにします。

昭和十五年七月一日

伊藤 貴磨 識

目次

一	前	置	一
二	答 <small>こたへ</small>	打ち	七
三	未來の約束		三六
四	ペルシャ王が大工の棟梁を罰した話		五三
五	鬼神カラッズ		六三
六	バラピットの泉		七七
七	悍馬ガラヴィン		八五
八	もの言ふ鷹		九四
九	妖姫グウルカ		一〇七
十	魔の海の百合		一二九

一 ヌーアナの生ひ立……………一三二
 二 魔海の女王……………一六六
 三 つるぎの宮……………一八四
 四 七人の兄弟と劍の主……………一九六
 五 事業のつるぎ……………二二四
 六 大鳥クウルウク……………二三〇
 七 覆面の渡し守……………二三〇
 八 ヌーアナの胸に……………二三八
 九 再生の猛火……………二四五
 十 戦略……………二五一
 十一 シャグバット邸襲撃……………二六〇
 十二 魔毛の怒……………二九〇

十三 劍の勝利……………三〇四
 十四 結末……………三九

裝幀 木村 莊 八
 挿繪 井元 水 明

ア
ク
リ
ス
の
劍

伊
藤
貴
磨

一 前 置

途方もなく奇抜で、素晴らしく面白いこの物語は、亞細亞大陸は南の方、ペルシャ（イラン國）を中心に、はるか西の方、コーカサス地方迄を舞臺としておこつた、一大奇談であります。彼の地方には、ユーフラトとチグリスの二大川、即ち先は別れても川口は一つの、夫婦川が流れて居ますが、何しろ此の沿岸たるや、人間が初めて發生した、人類最古の土地柄でありますから、奇々怪々の傳説やら、物語に、不斷に満々であることも、もつともな次第であります。

さて、昔この地方には、シャグバットと呼ぶ都がありました。この都では、上は國王から、下は物こふ乞食のはしまで、いつの世から、流行つた習慣でありませうか、生れて死ぬまで金輪際、一切髪の毛を剃らないといふ、習慣がありました。それで國中の

ものどもは、みんな熊か猩猩か、頭は玉蜀黍、男まで、雀の巢とはおろかなこと、頭上に深林植ゑつけて、ゆつさくと歩くのです。なかでもひとときは際立つた、深林、竹やぶ、昆布の林、といつても足りない、眞つ黒々の、むら雲を頭になびかせたやうな男がありました。

此の男は、大そう自分の髪の毛が自慢で、いつも人に見せつけては、孔雀も顔負けするやうな、みえのさりかた、して歩くときには、數多の從者が、左右から、髪の毛の天蓋を受けて、通行するといふ有様でした。

元來この男は、親代々からの呉服屋で、男の名前はシャグバット。都の名前もシャグバット。いや此の男が、あんまり名高いものですから、いつか都もほんたうの名は忘れられて、シャグバットとは呼ばれるやうになつたのであります。

さて、シャグバットが、この都の守り神のやうな、途方もない人氣がありますのはその頭上の、偉大な髪の毛のためのみではありません。實は、その八幡の藪知らずの



やうな、髪の中の真中に、一本の魔法の毛筋が植ゑつけられてゐるからなのです。この魔法の毛筋の威力といへば―これから段々に述べますが―人の心の真理、信仰、世の中の權威、財力を、一丸にしたよりも、もつともつと廣大な神通力を持つてゐるのです。

さても、シャグバットは、髪の中の都なら、床屋は無用。もしも知らいで入國しようものなら、外道、畜生、馬の骨とさげすまれるは定の事、めつたに商賣道具の、剃刀でもひけらかさうものなら、すさまじい怒りをうけて、百も千も咎うたれ、城門の外へとおつぼり出される始末でした。

こんな奇態なシャグバットから、大分離れたシラツズの町では、これは又、床屋が大もてにもてて、町の人々は、毎日頭髪にチョン／＼鋏を入れ、顔をツル／＼剃り上げて、沙漠にのぼる、朝日夕日に、テラ／＼させるがつとめのやうでありました。さ

ればこのシラツズの町の、床屋といふ床屋は、滅法の腕さゝで、その上尊敬せられることといへば、端くれまでが名士あつかひ。その中でも、一番の腕つきさ、床屋の大將おしやべり屋のムステーフアといへば、もつたいたなくもペルシャ宮廷の理髪長をとめ、お家柄は名家、お人柄は名士、町では名物と、もつぱらの評判でございました。

またこの、おしやべり屋の、ムステーフアに、シブライ・バガラッグと呼ぶ一人の甥があります。腕はをさ／＼、伯父にも劣りはないが、元來の漂浪兒で、冒険兒で、年齢はまだ若いにかゝはらず、名代の伯父の、口先の速射砲で、日がな夜がな語りつづけても、語りつくせないといふ程の、冒険談の主人公でありました。

さてこの一代の冒険兒シブライが、シャグバットの都に乗り込み、熊男シャグバットの頭を剃つてのけ、人智の上にかぶさつた、迷信、迷妄を、ころりとうそのやうに落さうといふのが、この話の大筋であります。それしきのこと、何の變哲もなからうといはるる諸君は、次にあらはれる、めざましい冒険、奇々怪々の魔法、眞に奇想天

外、震天動地の、場面のかずくを御覽になれば、定めし合點のゆかれることでありませう。

二 笞打ち

シブライ・バガラッグは、伯父ムステーフのおしやべりにもあき、ありがたすぎる境涯きやうがいから、又もや脱け出して、何度目かの、放浪と冒険の旅にと出かけました。そして、めぐりめぐつて、ちやうど、幸か不幸か、呉服屋シャグバットの住んでゐる都が、目の前に見えるほとりまで、さまよつて來ました。

この時シブライは、腰をさぐつて見ても、もはや一錢の取つときの金もなく、ひもじさに氣ぬけがして、さてこれから、どうして食事にあつたものかと思案投首でとぼく／＼と歩いてゐました。近いやうで、砂原はなか／＼歩きでがある。ます／＼脚は疲れる、腹はへる。やがて頭がくらく／＼、眼はちら／＼。はては、うまい物をもり上げた大皿小皿が、渴かわきにあへぐ沙漠さばくの旅人が、よく見るといふまぼろしの泉オアシスや河

のやうに、あり／＼と眼の前にちらついてくる有様。

『あゝ、あゝ。』と彼はつく／＼今の自分の身の上を考へて、『これといふのも、身から出た錆、無鐵砲な冒険好きがたゝつたのだ。床屋がもてはやされる、故郷のシラッズにさへ居たら、なんと今頃は、おしやべりやのムステーフア伯父と、うまい物を取りよせ、ほほばりながら高あぐらで、出放題のむだ口をたゝいてゐられるのだ！』と嘆息しないではゐられませんでした。

やがて、小高い砂山に來たので、一本の椰子を小楯に、前方を眺めますと、華麗なシャグバットの都が、はるか一眸のもとに、手に取るやうに眺められます。黄色い寺院や、禮拜堂、黒々とした杉木立に、大理石の宮殿の御門、ぴか／＼する塔の頂、虹やうにせり上げて、空にかゝつた圓い大門などが、蜃氣樓ならであり／＼と、眼にせまつて參ります。

彼は、しばらく俯ぬけたやうに、見惚れてゐましたが、眼の保養は、うす粥ほどでも腹にきゝめはありません。彼は又しても、シラッズの自分の家の、贅澤なひる飯が思ひ出されて、絶望の胸を打つて、砂の上のところがり、『おゝ、こんなつらい目にあふのは、どうしたわけだ！ ひよつとすると、性わるな魔物がおれについて、そやつがおれを手玉にとつて、おもちゃにしてゐるのにちがひない。』とかきくどいて、もう心から、氣力も抜けはて、もう一步も歩く元氣もなくなつて、砂の上に長くのびてゐました。

すると彼の近くに、いつの間にか、誰かがきて、立つてゐる氣配がします。だるい首を持上げて見ると、それはよつほど老けた、一人の皺くちや婆さんでした。顔はあくまでしなびて、鼻の下は、口に齒が一本もないらしく、ぐつと落込んで、横に一字を深く引いてゐますし、節々は飛蝗のやうにとげ／＼して、どう見ても、歳月の航海の、最後の暗礁に、ひたと乗り上げた人間といふ風に見えます。

この女は、つくづくとシブライを見て、さて、

『もしく、お若い方、どうなさいました。そんな所にねんねして、何やらぶつくさ
と、まるで氣狂きらがひのやうではありませんか。』といひました。

『氣狂にもなりますよ。腹がへつて死にさうで、それかといつて一文なし、こんな他
國で、これから乞食するより仕方がないと思へば……』とかう彼は答へました。

すると老婆らうはは、一そらまぢく〜と彼を見て、

『見ればあなたは、他國のお方、身の上話を、どうか聞かせて頂けませんか。』とい
ひます。

『よろしい、いや聞いて下さいをばさん。私の生れ星は、占者うらなひしやのうそ八百に、ひど
い目に逢はされると決つてゐたらしいのです。といふのは、彼等の一人は、ある日私
に向つて、お前さんは床屋になつて、剃刀かみそりさへにぎつて居れば、えらい功名を立てる
日がきつとやつてくると、かう豫言したのです。これを聞いてからの私は、眞つ正直
に金持ちや、貴い身分の方々の、結構な申出も皆ことわつて、金と位には目もくれ

ず、剃刀一ちやうを、武士の刀とも思つて、ひたすら揮ふるつてゐましたが、ねつから功
名にも出くはず、故郷のシラツズで、しやべり出すと涯はてしのないので有名な、伯父
のムステーフと、食べるだけは事かゝず、安樂に其の日を送つてゐました。その時
ふつと、『わが運はわが身で開け、テントを張るには日に日に前方まへへ。』の諺ことわざに従つ
て、近づいて來ないものなら、自分で搜して見ようといふ氣になり、手馴れの剃刀お
つ取つて、諸方の都會をへ廻めぐりました。そして、それはもう色々の目に出逢ひました
よ。ある都では、床屋が大もてで、都中の尊敬が私一人にあつまり、そして絹布おかひこぐる
めでいらつしやる、世の宰相さいしやう方にも劣らぬ、豪華がうしゃな生活くらしもいたしました。かと思ふと
又ある都では、犬畜生にも劣るもてなしを受け、さらはれる、にくまれる、泊めてく
れてもない程ですから、無論仕事のたのみ手もなく、うろくすれば病犬やまいぬ同様、足蹴あしげ
にして、追つばらはれる始末しまつでした。これといふのも、ある理由わけがあるからです。こ
の頃世間へ、魔法まほうの毛筋けすぢとかいふ、迷はしの魔力の廣大な、とんでもないしろもの

が現はれ、そのため床屋は、どこへ行つても人様から、評判を落して忌みさらはれるやうになつたらしいのです。もう床屋はかうなつては、おつけ此の世からほろびるでせう。といつて私は今になつて、この職業を金輪際やめようにもやめられません。これからあの都へと志すのですが、もう功名などと、夢のやうな事は考へません。やつとこさ飯が食へれば満足です。ただ心配なのは彼所でも、魔法の毛筋とやらに、たぶらかされた人間が、大分居さうに考へると、おづ／＼して來るのです。人間といふものほど、ふは／＼と移り氣で、薄情なものはありませんや。なんとをばさん、氣の毒な、あはれな身の上ぢやありませんか。』とこゝまで云つたのも、シブライには、精一ばいでした。

老婆はさいて、ぶる／＼と着物をふるはし、

『あゝ、もしお若い方、御安心あそばしませ。わたしには、その占者の申した言葉に、どうやらうそいつはりはないと思はれます。貴方はその功名の入口に、立つてい



らつしやるのです。いやもうそれに、手をかけていらつやしると、申上げてもよいくらゐでございます。』と叫んで、伸び上つて、じいつと砂の上に眼をさらし、砂の上に引かれてある一條の線ひしぎにそつて、若者の足跡が、一直線に印おされてあるのを見るや手を打つて、小踊りこまどして勇み立ち、若者のそばへ走せよつて、その顔をのぞき込んでいふのでした。

『ねえ、貴郎、貴郎は大功名がとげられますよ。さあ、その占者うらなひしやにお禮でもおつしやい。事業をさがしておいでになつたといふのも、その人のおかげぢやありませんか。もしもし、ムステーフ様とやらの甥御様なひご、わたしはもう貴郎を、大事業の成功者と申したいくらゐでございます。』

それから彼女は、

『もし、あすこに見える都會に、シャグバットと申す、呉服屋が住んで居ますが、その男ほど、貴郎様のお手をわづらはす、人間はございません。ちやつとあの町へおい

で遊ばして、床屋の手並この時と、すばやく、陽氣に、大膽に、呉服屋へふみ込みなさいませ。シャグバットといふ男は、髪の毛が自慢で、通行人にほめそやさせようと、いつも店前みせさきに、ころがつて居ります。土龍もぐらにでも、百万人の中から、あの男を見分けられるくらゐで、めつたに見違へる心配は御無用。してその家へふみ込んだら、さも深切でもつくしてやるやうに、『お前さんの、魔法の毛筋“だけは残してあげるよ。』と、かうおつしやいませ。するとあの男もさるもの、智慧の固まりのやうな男ですから、『はて、ううん……』と、とぼけたやうな返事をいたしませう。そこを貴郎は、早速のはやわざ、うむを言はせず目にも見せて、すつぱりとやつておしまひなさいませ。それが大事業となるのでございます。まあ、只今は、貴郎様がのみこめるやうに説明するのはむつかしうございますが、貴郎がいよくシャグバットの毛剃けぞりを、爲しおほせになつたとすれば、それこそ未曾有の功名となつて、床屋仲間の第一の偉人と、うたはれるは勿論のこと、世界的難事の克服者こくふくしやとして、シブライ・バガラッグの名は

百代までも、歴史の記録にのこることゝなりませう。』

こんな風に老婆のいふのを聞いてゐると、彼はわかつたやうな、わからないやうな——しかしただ、大風がごうつと胸の中を吹きぬけたやうな、理由わけのわからぬ感動だけはおぼえるのでした。そしてしばらく頭をたれて、

『こりや、どうぢや、まるでいろはを習ひ始めた子供が、突然魔法の書物の、一章を開いたやうなものぢや。しかしこの婆さんは、ひどく煽おたての上手な女だ。それにしてもあやしいことは、未だ名乗らぬおれの名前をいつたやうだが、不思議だなあ！こいつ魔物ぢやあるまいか、おれをあの町へおびき出して、生命いのちをとるつもりかも知れない……』とうたぐつて見たり、『いやいや、さうでもあるまい。大方これは、自分の誕生たんじやう以来まもつて下さる守り神で、以前に占うらなひ者がいつたやうに、おれに大事業を果させるやう、導いてゐて下さつてゐるのかもしれないぞ！』とも思ひ直すのでした。

そして、ふいと顔を上げて見ると、老婆の姿はありません。仰天して幾度眼をこす

つて見ても、全く消え失せてしまつてゐます。ます／＼驚いて、彼は近くの砂山に駆けのぼつて、四方を見渡しましたが、どこにも彼女の影も形もありません。そこで、『では今のは夢であつたのか！』と彼は、ちよつびり生えた草の上に、どうと倒れると、とたんに又、苦しいほど腹のへつたことが感じられて、以前の落膽した気分がよみがへつてきかけた時、ふと下の都會の方を見ますと、街の一方に、ざわ／＼と人波が立つて、何か事ありさうなのが、手に取るやうに見えて來ます。で彼は、

『夢か、夢ではないか、兎に角、あの都會へ行つて、先つき聞いたシャグバットといふ男が、居るか居ないか訊いて見ることだ。萬一さういふ名の人間が、あすここに居たとすれば、おゝ、アラアの神様！私はいま先つき、通力自在な鬼神きじんと、話し合つたことになります。』と彼は決心して、一大奮發心を起して、前方の都會の方へ歩み出しました。

正門から一步は入りますと、こゝは國內第一の都會といはれるだけあつて、市街の

美しさ、にぎやかさは又格別であります。四方ははてしない沙漠で、麒麟や羚羊も住めば、虎や獅子も猛威をふるつてゐますが、城内は、ダマスクス人、バクダッド人、ウールプ人、それに、當時大商民として名高かつた、リングヒー人などが、隊商を組んで、こゝと交通をたやさないもので、諸國の珍しい品物が、山のやうに集つて、その繁昌ぶりといへば、眼を見張るばかりでありました。

さて、シブライが、物めづらしく、とある街を歩いてゐますと、今しも一團の行列が、向かうからねつてきます。真先の方は、黄色い上着をきて、ピカ／＼した金の冠をいただいてゐましたが、それにもまして、その房々した豊かな髪こそ、實にならびなく見事に見えました。次につづいた男の髪は、少しは見劣りはしましたが、それでもすばらしいものでした。

『このうちの一人が、きつとシャグバットであらう。そして此の國の國王様であるかも知れない。なぜなら、これまでこのやうに見事に生えた髪には、お眼にかゝつたこともがない。おゝ、あの頭へ剃刀を走らせて、あたりにかゝつた黒い束を、ばらりばらり切つて落す時の、心持はどうであらう。』と考へながら、彼は國王の御通の前方に進み出で、平伏して居ました。すると幸せにも、王様は從者が彼を引き退けようとするのを制して、いづくの者で、何用あつて此所へ參つたかとおたづねになりました。シブライは最敬禮をして、うや／＼しく答へました。

『御威徳ならびない國王様に申し上げます。お目にとめられましたる私めは、シラッズでは、ちつとは世に聞えましたる床屋ババ・ムステーフアの甥、同じ床屋を致すものにござります。願はくば、王様の御仁慈と御最良とをかうむりまして、この都で總髪に致してゐる人々の爲め、いさゝか力を盡したい心願でござります。』

すると、國王の眉は、見る／＼つり上り、

『何と！ シラッズの者ぢやと、はて、床屋など送つてよこすとは、あいつらはまだこのシャグバットに對して、敵意をつゞけてをるな。シラッズ！ あすこは無道者の

巢ぢや、まるで毒蛇の穴ぢや！」と言つて、『こ奴をどうしたものであらうか。』とお側の宰相に、あたづねになりました。

『陛下、かやうなやからは、五十鞭もくれまして、その職業のけからはしいものであることを、とつくと思ひ知らせるが、よろしうございます。』と宰相はお答へ申上げましたので、『しからは、さやうとりはからへ。』と王様は、威風あたりを拂つて、前進なされます。

シブライは、そこで早速五人の下役に取りおさへられて、重罪人あつかひで、市中を引き廻され、五人から各十鞭づつ、革紐の鞭で、ピシリ／＼と打られました。そして、それが終ると、勝手にうせる！ とつっぱなされたのでした。

彼は、このひどい侮辱と、骨身にとほる鞭打ちにあつて、自分で自分に愛想がつき『ああ、自分は長年、大事業をさがしてゐたが、今になつて見れば、すべてに換へても、一皿の御馳走がほしいものだ。』とすき腹を抱へて、あてもなく街をさまよひ、

思ひ出しても腹の立つことは、彼の老婆のことで、『汝、性惡の惡たれ婆アめ！ 人をだまして何の得がいくのだ。貴様のいふ事を信用したばかりに、こんな痛い目にあつて、汝は夢でなかつたどころか、骨身にこたへて、一生忘れられない程ぶつたゝかれたわい。』と老婆を罵倒しながら、夢中に歩いて居ますと、ふと前方の異様な有様が目に映りました。

それは一軒の店先に、一人の男が牛のやうに臥せつて居り、道行く群衆が、それを見て指しては、感嘆の眼を見はつてゐる光景でした。その男は、全くの毛むくじやうで、全身に植ゑられた眞黒の毛は、針鼠よりもふくれ上り、ことに頭といへば、藪をすかして見た、一粒の苺のやうなのがその頭でした。

『やあ、これこそシヤグバットだ。土龍にも見分けがつくとは、よく云つたものだ。』とシブライは、感心して、つくづくこの呉服屋の男を眺めました。『なる程、老婆の言つたやうに、群衆の前に寝ころんでゐて、さても堂々たる押出しぢや。髪の毛も、

よもやこれ程大變なものとは思はなかつた。これでは通力もあらう。しかし床屋には一段と上の通力がござるぞ！ とは云ふものの、この都會では、床屋がさげすまれて髪の毛の伸びた人間が、尊ばれるのだからなあ。』と嘆息しましたが、眼を皿のやうにしてあかず眺めてゐるうちに、『ああ、あの頭が剃つてみたい。手練の手並をふるつて見たい！』といふ氣が、むらくと起つて、もう／＼その呉服屋に、飛び付きたくてたまらなくなつて來ました。

『今はちやうど幸ひ、見張りの邪魔者もゐないやうだし。こゝであの婆さんの言葉を信用してなぜ悪い。婆さんも直接シヤグバットに談じ込めと、教へたぢやないか。それを間違へて、國王などにかゝり合つたから、引つぱたかれたのだ。よし／＼、もう一ぺん、婆さんを信用することにして、思ひ切つて大事業に有り付かう。』と獨言をいひながら、更に近附いて眼をそゝいでゐると、先程からの飢しさも打ち忘れ、いよいよシヤグバットの家へ踏み込んで、毛剃りの談判を開始しようと、勇み立つてくるのでした。そこで彼は進み出で、

『やあ、今日は、呉服屋の御主人。貴方のことは、かね／＼承つて居りましたが、今お見受けして、一そうびつくり仰天いたしました。それで、貴方に尊敬を、心ばかり表したいのですが。』

『よからう！』とシヤグバットは、身動きもしないで尊大に答へました。

『これは、早速の御承引、私も思ひ立つた甲斐がございます。實は私は、今日初めてこの街に、到着したばかりの床屋ですが、いの一に貴方の頭を剃つて進ませう。』

『なに、頭を剃る？ 冗談もたいがいにしとかんかい、失禮な。』とシヤグバットは突慥貪に言ひ放ちましたが、その顔は少し曇つて來ました。

『いや、御主人、冗談ではない。眞劍に申すのです。』
とシブライは、あくまで眞面目です。

すると、シヤグバットの顔は、見る見る藪の中の葎のやうに、まつかになつて、

『もう、止せと云つたら、わしの痲癩玉の破裂せぬうちに、止さぬか、これ！』
と猛り立ちました。シブライも負けてはゐませぬ。眼をばち／＼させ、相手の頭を指して、手ぶり足ぶりよろしく、毛剃りを強請して、

『御主人、感違ひなすつちやいけません。私は床屋でも、シラッズのシブライ・バガラッグと云つて、ペルシャ宮廷の理髮長、ババ・ムステーフアの甥ですぞ。貴方もかね／＼私の手並を、聞き知つてをられやう。二三遍つるつると撫でるだけで、綺麗につむりをこしらへて進ませせう。但し貴方の大切な“魔法の毛筋”だけは残しますよ。その見分けが出来ないやうな私ではありませんから。とにかく達者な私の腕におまかせなさい。』

冗談でないと知ると、シャグバットは、毛むくじやらの身體に波打たせて、烈火の如く憤り、聲ふる／＼とふるはして、舌はもつれて言葉もされ／＼、

『なに床屋だと！ まことわしを床屋が！ この外道、非人、馬の骨、犬畜生！ わ

しほどの名譽の人間に、何をいふかと思へば……この大馬鹿者の、けがらはしい耻し
らず奴！』

そして、大聲で女房を呼び立てました。女房は奥から飛び出してくるや、シブライに武者振りついて、

『お、私の大事の大事の旦那さま、一體この男がどうしましたかえ。』

と彼女が叫んだ時には、もう引つかく、噛み附く、打つ——のさん／＼の後、やつと一と息といふ時でありました。

『そいつは床屋ぢや。わしの頭を剃らう、剃らんうちは、後へは引かぬとほざき居つた。』

から聞くと、猛りたつた女房も、さすがにびつくり、色青ざめてぐんにやりなつたその隙間に、シブライは店先へところがり出て、はふはふの體で、一目散をきめ込ますとすると、はや戶外に集つた群衆は、承知せず、どつとばかりに追つかけて來ます

ので、彼は小路といはず空地といはず、盲滅法逃げまはりましたが、『シャグバット様へ無禮を働いた奴め、奴め！』の罵り聲は、街中から涌きあがり、とうとう彼を逃さじと押つ取巻いて、我もくと、彼の背中を滅多打ちにし、存分なぐつてしまふと、暫でかついで、ぼろくづをつめた俵のやうに、城外の荒野へと放り出したのでした。彌次馬が行つてしまつてから、シブライはひよろくと立ち上らうとして、又ばかり地上に倒れ、うつぶしたまゝ、おいくと泣き出し、『それにしも、につくい婆アだ！』と心の中で、恨みに恨むのでした。

彼が切りに、泣きわめいてゐる所へ、以前の老婆が、又ひよつくり現れました。そして、シブライをじいつと見下し、自分の心の計畫が、うまく進行してゐるのを喜んでゐるかのやうに、さもうれしやうに、皺だらけの顔をもぐぐさせて、

『もし、お若い方！ 床屋さんの甥御さんえ、此方をお向きなませ。』と云ひました。俯伏してゐた彼は、聲であの婆さんだと知りましたが、顔もあげず、『あゝ恐しい婆さんだ。悪口を言つたとたんに現れたわい。』と考へてゐます。老婆は、彼が受けけないのをさとつて、彼のそばにしゃがんで寄りそひ、

『貴郎は打たれなさいましたね。ですが貴郎は、眞實大仕事をさがしていらつしやるのですか。』とききました。シブライは、痛さにうめいて、返事はしません。老婆はさらに言葉をつづけて云ひました。

『私はたゞ親切のつもりで、お尋ねするのですよ。貴郎はそれに、すねていらつしやる。憤つていらつしやる。ですが、今は躊躇してゐる場合ではございませんよ。貴郎は一寸打たれただけで、もう尻込みしていらつしやる。何故、打たれば、打たれるだけ、勇氣をふるつて突進しようとなさいません。』かう老婆はいつて、やさしい言葉で、若者を説伏せずにはおかぬといふやうに、つづけました。

『シブライ・バガラッグ様、よくおきき下さい。私は貴郎をお助けして、貴郎に御運を開いてあげるやうにと、神様はとくに、決めていらつしやるのです。さあ、いい子

になつて、起き上つて下さい。そのうち、けつこうづくめのお食事も、差上げますから。』

食事ときいて、現金にも彼は、ぱつと面を上げました。と老婆は、ずるさうなうす笑をして、埃をかぶつた地蟲のやうに這ひより、

『もし、お若い方、私は美しくはございませんか。』とたづねました。彼は心中驚いて『貴女は、貴女のその通りぢやありませんか。』と、くさしも出來ず、あいまいに答へました。

『まあ、お口が悪い。しかし、やがて私は、本來の私の通りになりませう。』と言つて『私を信じて、もつとやさしくはして戴けませんか。』と老婆は、強ひるのでした。

彼は全く困つて、——あんなでたらめを教へて、自分をひどい目に逢はせ上に、こんなうぬぼれを連發して、おれをむか／＼させるとは……と、彼は怒つて、すねて、むつとして居ますと、

『ホッホッホ、御無理もございませんわ。時節到來まで、ゆるして置いてあげませう。だがよつくち聞きなさいませ。貴郎と私とは、一しよに働かねばならないやうに神様がお決めになつてゐるのです。私はとうから、それを占つて知つてゐました。その證據には、貴郎が此所へおいでになることを、ちやんと存じてゐたではございませんか。それで私は今、貴郎に本當にけつこうな、申込みをいたしませう。それは、貴郎の大事業をおたすけして、きつと成功させた上、尊い御身分にして差上げるといふお約束です。』

『なるほど、聞いただけでもけつこうなことですな。御禮を言ひますよ。』とシブライは、幾分ばかりにして叫びました。

『しかしそれは、貴郎が未來に——大事業を成就なすつた曉には、私と結婚をするといふ、お約束をなさるならばですよ。』

シブライは『うわは！これは大變だ。世界廣しと云へども、こんな難問題がある

ものだらうか？」と、一度は心に思ひましたが、老婆がも一度、眞面目に繰り返しますので、彼は眞劍に考へて見ました。『さてよ、この婆さんは、どんな事でも見透す通力を持つてゐる。悪い智慧もあるが、よい智慧もあるらしい。自分が大事業をするにあたつて、暗夜の松明、片腕の力とたのむ事が出来るかもしれない。だが困つたことは、この女の年齢が問題だが……しかし、世間の物語では、美しい可憐なお姫様が魔法のために、姿を變へられてゐるといふことも、よく聞く話であるから。』と、彼は決心して、

『をばさん、そんなら約束させよう。』

と言ひ切りました。そして、

『さあ、こんどは私への約束も、忘れないで下さいよ。私はがつ／＼して、とてもひもじいのですから。』と叫びました。

老婆はうなづいて、彼に従いて来るやうにと、さしまねきます。二人は、市の門を

は入り、幾多の街を通りぬけて、門柱いかめしい、りつばな家の前に着きました。老婆は來なれてゐると見え、づか／＼はいつて行くので、彼も進んで行くと、中央に、噴水が銀のしぶきを散らしてゐる、大理石をしきつめた庭を過ぎて、一つの大廣間の入口へと來ました。その廣間の中には、數多の家來や侍女に取巻かれて、一段高い所に、この御殿の主人、即ち大宰相が坐つてゐました。老婆はこの時、シブライを振り返つて、

『貴郎、剃刀の御用意は？』とたづねました。

『研ぎすまして、この手のうちに。』

『それでよろしうございます。』と老婆は言つて、彼の肩に手をかけ、『さあ、高座の方に御挨拶なさいませ。そして、貴郎の剃刀を力とたのみ、私も附いてゐますから、どんな事が起らうと、怯めず屈せず、しつかりとおやりなさいませ。』と言つて、彼を内へと押し入れました。

シブライは、氣おくれがして、まご／＼してゐると、宰相は、

『手前は何といふ者ぢや。して何の用あつて參つたか。』と叫びました。シブライは、又背中を打たれやしないかと、びく／＼しましたが、勇氣をふるつて、大聲で、

『殿様へ申し上げます。私はシラッズの、シブライ・バガラッグと申します者で、理髮長ババ・ムステーフアの甥でございますが、伯父同様床屋をいたし、手並に覺えはいさゝかございます。』と申し上げました。

『なに、床屋だと、けしからんことを申す男ぢや。身の程知らぬ、そゝつかしい奴ぢや。こりや床屋、云つて聞かせてやるが、此の國では、床屋の職は誰しもしやしんでゐるのぢや。諺ことわざに、藝故げいに尊たふとばれ、又藝故に鞭打たると云つてある。それに自分で床屋などとほざいて、まるで自分の舌で、自分の罪を吹聴ふいちらうして、打たれに來たやうなものぢや。』かう言つて、宰相が左右に合圖をすると、バラ／＼と五人の下役がをどり出し、彼を取つて押へ、ヒュウ／＼と革の鞭をうならせて、五十鞭打ちたゝきました。

集つて來てこれを見てゐた群衆は、『いゝ氣味だ。』『天晴あつはれの裁ささだ。』『さすが大臣はえらい。床屋などけがららしい奴は、鞭打つてやるにかぎる。』などとわめいて、一齊かつさいに喝采かっさいしました。

やがて、見物の群衆が去つてしまふと、宰相はシブライの方を眺めて、ワッハッハと笑ひ出し、雲のやうに頭にかぶさつた髪の毛を、ゆさぶつては、なほもげら／＼笑ひつゞけるのです。そして、急に柔和にうわな眼になり、

『どうだ、シブライさん。芝居は上出來だつたなう！』とよばりました。

『仰せの通り、上出來で……』とシブライは答へましたが、狐につま／＼れたやうに、何が上出來やら解わからず、打たれた痛さに、不服さうな顔付をしてゐると、

『ハハハ、お前の顔は、不運つゞきで困り抜いたやうな顔だ。だがそれも修業ぢや。事によると、先で大變な成功にあり付くかも知れんぞ。』かう宰相は、なぐさめ顔に言つて、はじめて下僕しもべに云ひ付けて、金杯きんはいになみ／＼と注いだ酒と、いろ／＼の肉や野

菜の料理とを、シブライの前にならべさせました。彼は飲んだり、食つたり、腹一ぱいになると、やつと元氣が恢復して來ました。宰相はにこにこして言葉をつづけて、『シブライさん、貴下はもう打たれるやうな事はありませんよ。貴下の試煉も大分つみました。しかし、もう一息ふんばつて、成功してもらはねばならん事がありますのぢや。』と言つて、一段と聲をひそめて語り出しました。

『まあお聞き、實はな、かう云ふわけだ。この國では、髪を伸すことがはやる。一番りつばな髪を待つてゐる者が、一番尊ばれる。だから床屋は、憎まれ、嫌はれて、うだつが上らない。わしが宰相になれたのも、つまり上手に髪を生したのと、髪を剪る床屋らを、迫害して追拂つたからだ。ところが今この國で、わしにも劣らない髪を持つた者が、唯一人ゐる。それはあのにつくい呉服屋だ。あいつは、自分の髪を鼻にかけ、いつも店前にころがつてゐて、通行人を仰天させて、ほくそ笑んでゐる。それに、國王の覺えも目出度くなつて來たからには、いよくわしの敵ぢ

や。で、どうかシャグバットに恥辱をあたへてやりたいと思ふ。シブライさん、貴下の助力を得たいといふのは此所ぢや。』

かうきくと、シブライは、はじめて合點がいつた氣がし、自分の復讐もしたいといふ氣が起り、『かしくまりました。命をかけてもやりませう。』と叫びました。そして彼は、これが大事業の緒ともなるのであらうと、はや新生涯の美しい幻を、眼の前に描いて、切りに勇み立ち、『それは面白いでせう。けつこうです。勇んで殿様の御用をつとませう。』と小をどりして勇み立ちました。

すると、宰相も満足して、

『では、これからわしの軍師の彼の娘を呼んで、早速相談しよう、平常の通りにな。』と言つて、廣間を出て自分で案内して、小ぢんまりした部屋に、シブライを導き入れました。そこは銀張りの美しい部屋で、白絹の掛布がかゝつてゐました。窓からは花園や噴泉や、涼しい樹蔭が見下されます。二人がこゝで、暫く雑談をしてゐますと、



そこへ、シブライと先きに約束した、老婆が現れました。彼の女は前とは違つて、まるで女王のやうに着飾つてゐます。珠入りの金の鉢巻を額にあて、眞紅の衣の裾を長く引き、金糸で刺繍した靴をはき、腰には寶石の帯をしめ、頭髪を肩越しに波うたせて、しづく／＼とはいつて來ました。おやつ！と思つて見ると、不思議なことに、この老婆は前よりは餘程若くなつてゐました。シブライはこれを見て、『不思議なこともあるものだ。バナヴァー姫が若返つた話は、昔話に聞いたが、それではこの老婆も、バナヴァーのやうな女かも知れないぞ！』としきりに首をひねつてゐると、宰相は大聲で、

『どうです、美しいでせう、わしの娘は。』と叫びました。

『えゝつ？……』シブライは、何と言つていいかわからず、『このお方は、このお方の通りでございます。』とあいまいに答へました。

『いや／＼、この娘は、今になるやうな娘ぢや。今に本來の姿に生れ變るのぢや。』

と宰相の言葉は、謎のやうなので、

『では、殿様、お姫様は美人バナヴァーのやうな方ですね。』とシブライが云ふと、

『そのバナヴァーといふのは、どういふ女ですか。』

と宰相も娘も、同時にたづねました。

三 未來の約束

そこで、シブライは語り出しました。

『美人バナヴァーとして、云ひ傳へられてゐる女は、こゝから西方の、コーカサスの或る部落の、酋長の娘でした。彼の女は虚榮心が強く、未來の夫となる男の命を犠牲にして、ある湖に住む、千年の大蛇の玉を得、その魔力の爲にますます美しくなり、長年諸國の貴公子や、酋長を迷はし、自由にならぬ者は、玉の通力で蛇の魔術を使つて、苦しめて居ましたが、やがて、魔術の切れる年限が來て、急に醜くなりました。が、年に一度、青年の命を取つて犠牲にすれば、又元通りの美しさになれたので、自分の美のために、多くの若者に命を失はせてゐたといふ、云ひ傳へなのです。』

『まあ、怖しい！』と、此の話を聞くと、彼の女は、シブライの方に、うらむやうな

眼差を投げて、叫びました。

『私は、そんな怖しい女ぢやありませんよ。』

すると、宰相はゆつくり髯をひねつて、ほゝゑみながら、こんどは自分の軍師の方に向いてたづねました。

『なう！ ヌーアナ。お前の方は、この床屋の甥御さんを、どう思つとるかね。』

『お父様、私はこの方を、りつばな青年だと思つてゐます。例の企てを遂げるのに必要な資格は、全部此の床屋の甥御さんに備つて居ります。この方はちよつと輕はずみで、時には虚榮に有頂天になつて、途中でつまづくことはあつても、正直といふ強い支柱を持つて居られます。それに、勇氣があつて、冒険好きの上に、情も、恩といふことも、確かに知つていらつしやるやうです。ですから、私が城外の砂山で考へた通り、この方の運は、きつと私共の運命とからみ合つて居て、シャグバットの毛剃をなさるは、此の方以外にはないと存じます。』

と答へるのを、宰相はきいて、

『なるほど、あれだけ敵^{たか}れても、まだシャグバットをねらつてゐる所は、なか／＼をらしい。末頼^{すゑたの}もしい青年ぢや。……よし／＼、それではお前の決心は決つたが、これシブライさん、貴殿^{あなた}の最後の決心はどうぢやな。』と、シブライに返答をせまりました。

シブライは、はなはだ當惑^{たうわく}しました。そして考へ込みました。——この女は、おれを鞭打^{むち}たせるやうに仕向けたひどい女だ。それにこんなにお婆さんだ。……だがこの女は、歳^{とし}を逆^{さかさま}に取つて、段々若くなるといふ女で、何か不思議な身の上話があるに相違ない。この宰相がこの女よりも年寄りで、この女が宰相の娘だとすれば、何かのはずみできつと若さが盗み取られたのだ。その上女には、大それた智慧があり、何かしら、人を信じさせる、強い真心があるやうだ。——と考へて來て、彼は遂に承諾することに決心しました。

『よし／＼、これで目出度い話も決つたわい。』と宰相は、大にこ／＼で言ひました。

『では早速出入りの公證人を呼ぶとしようか、あの男なら、安心して祕密^{ひみつ}を打明^{うちあか}してもよいわい。あれに云ひ附けて、今日この場で、この國の習慣通りに、許婚^{いひなづけ}の儀式をすませ、約束の證書を書かせるとしよう。さうすればこの青年は、わしどもへしつかり結びつくのだ。わしども三人は、親子になつてしまふわけだ。そして大事業の目的も、三人一つになり、この青年にも一そら勵^{はげ}みが出る譯ぢや。』

宰相は使を走らせて、公證人に出頭を命じました。公證人は、シブライ・バガラッグと、ヌーアナ・ピン・ヌーアカとの許婚^{いひなづけ}の式を執り行ひ、契約^{けいやく}の條件を書き、規定の人数の立會人に、それを保證させました。それから皆の間に、祝辭が言ひかはされた後、宰相は聲を一段と張り上げて、おごそかに、

『これで目出度い。二人は仲よくしてもらひ度い。弱い方は強い方へすがれた。二つの體は一つぢや。その間に隙^{すき}が出来てはならぬ。隙があつてはそこから敵につけ込まれ、人生の失敗者になりますぞ。』と教訓をあたへ、公證人と立會人等を招いて、二人

を残したまへ、其の室を出て行きました。

二人になると、ヌーアナは、

『これで私は、シャグバットの手からのがれた譯です。こんな嬉しいことはございません。』と如何にも嬉しさうにいつて、にこ／＼してゐます。すると不思議なことに、内に秘めた名玉の光が漏れるやうに、彼女の面から新しい光がさして、しなびた顔もいくらか若返つたやうです。シブライはおどろいて、彼女の顔を見詰めながら尋ねました。

『シャグバットの手から、のがれたとおつしやると、すると彼奴めは、私がこゝへ參る以前に、貴女へ望みをかけた事でもあつたのですか。』

『靜かにして下さい。そんな風にあけすけに大聲で仰有つては、危険でございます。』

彼の間諜が何所からうかゞつてゐるか知れませんが、と彼女は言つて、言葉を改め『貴郎、私は魔術にかけられてゐる魔法使でございます。今御覽になつてゐるやうな

姿でないことは、やがておわかりになりますから、それまで待つて下さい。きつとお待ちになつた甲斐はございます。貴郎は今私を、熟し過ぎて落ちた腐れ石榴ほどに思つていらつしやいますが、今は何も申し上げますまい。……前に申上げたやうに、貴郎は私とシャグバットとの間に、割込んで御出でになつたのです。あの男は人々に敬はれるのに附け上つて、父に私を妻にくれと申込みました。私が智慧があり、私のこんな姿になつてゐるわけも知つてゐるからで、ほんたうにいやな奴でございます。父は勿論立腹して聞き入れなかつたのですが、王様はともシャグバット最貞でいらつしやいますから、それからといふものは、父は王様に御覺えがよろしくなくなつたのでございます。』

『全く驚きました。まだ謎のやうです。では呉服屋の分際で、一國の宰相に、娘をくれと迫つたり、國王に不興を買はせたりする程の、勢力があるといふものですな。』
『全くでございます。貴郎はまだ、シャグバットがどう云ふ人間であるかを、御承知

ないのです。御覽なさい、私ども三人の外は、國王を始め此の都の人々は、皆あの男に魅せられて、あの頭にある唯一本の毛筋の爲に、翫具にせられてゐる態つたらありませんから。』

それから彼女は、

『あの魔法の毛筋は、魔法の毛筋のうちでも、一番通力の廣大なものです。しかもそれをシャグバットの頭へ植ゑたのは、この私なのでございます。』と言つて、嘆息をつきました。

『どうか私に、すつかり理由を話して下さい。』

『いえいえ、今此所で、シャグバットの事や、私の身の上や、又私に使はれて居る鬼のことなどを、くはしくお話しするわけには参りません。どうぞ貴郎の冒険の試煉が終へて、私と一しよに、「照る百合の海」と申す所をお渡りなさる時まで、お待ち下さいませ。その時には私は本の姿になつて居りまして、ほんたうに不思議な私の身の

上話をして、どんなにか貴郎を驚かして上げられるでせう。』

シブライは、この不思議な言葉を聞いて、その時は、全く何も想像することも出来ませんでした。が、シャグバットの頭にある一本の毛の爲に、全都の人々が魅せられてゐることを考へると、をかしくて、思はず大聲を出して、笑つて言ひました。

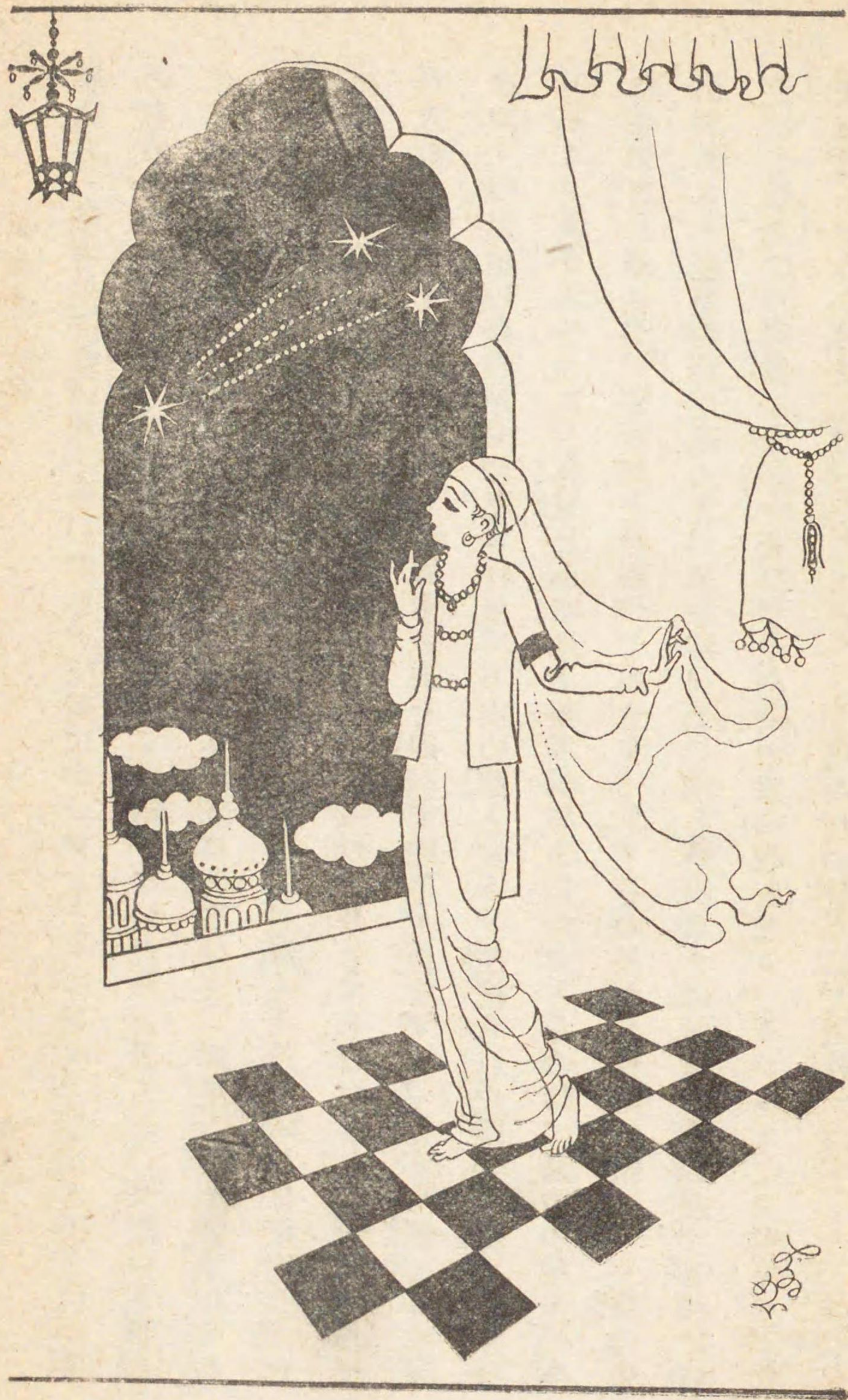
『それにしても、考へると、私も大膽なことしたものです。全都を迷はすやうな曲者、野に臥した虎のやうなシャグバットの頭を、剃つてやらうと云つて、一人で乗込んだのですから。これも勇氣だけは持つてゐる證據です。』

『この都會はるか、廣いウールプ國でも、あの男に迷はされない人はございませぬ。どこの政府も人民も、多少ともシャグバットの通力に、駁せられてゐると云つても過言ではございませぬ。ですから貴郎が、あの男の頭を剃つてしまふといふ大事業に、成功遊ばしたら、それこそ大それた御手柄です。後世に残すべき大事件として、歴史家は特筆大書せずには居ますまい。』

シブライは、熱心に説くヌーアナの顔を、じいつと眺めて、
 『貴女の言葉を聞いて居ると、不思議に釣り込まれてしまひます。まるで上等の美酒うまさけを飲んだやうに、血が湧き立つてきます。あゝアラアの神様！ 私はこれから、シャグバットの毛剃りをやつて退け、歴史に残されるやうな大事業を完成するのだと思ふと、身體がわく／＼して來ます。私はきつと成功して見せませう。……それにしても一體貴女は、私といふものが、此所へやつてくる事が、どうしてわかつたのですか。』と尋ねました。

ヌーアナはそこで、こま／＼と語り出しました。

『或夜のこと、私は月の出の前の、高殿に登つて、天文を見て居ました。すると、いつものやうに私の敵のシャグバットの星は、赤く大きく。私の星はその近くにあるので、光り負けがして、あつても無いやうな、弱い光でございました。所へ突然一つの新星あらほしが、天の一方から非常な勢で流れて來て、二つの星の間に、はたと止まつたかと



思ふと、私の星は急に光を増し出し、反對にシャグバットの星は、びんと張られた糸の上の指輪のやうに、ぶる／＼戦へて揺れて、暗くなつたかと思ふと、又ぱつと明るくなり、間もなく、蝸斗おたまじやくしに似た、頭の大きい彗星ほうきぼしとなつて、群星の間を游泳してゐます。一方、私の星をかばふやうに見えたその新星は、だん／＼私の星に近付き、終にはその圈内なかにに突進して、二つの星の光は全く一つに合してしまひました。私はびつくりして、どうなる事かと、動悸どうきする胸を押へて眺めてゐますと、やがて蝸斗おたまじやくしの星は、二つの星の合した光に壓おさされて、不安の状さまとなり、生擒いけどられた獸が、繩なはを振りほどかうとあせるやうに、狂氣きやうきじみて尾を振り始めました。とその時、私達の星——今はその合した星が、さうだとわかつてゐます。——その星から彗星ほうきぼしの頭へ、一條の光がビューと進はしつたかと思ふと、又一條、又一條と續けさまに射出しました。これに打たれて彗星は、以前の光芒くわうぼうを失ひ、つや消の銀の輪となり、キラ／＼した群星の間に元氣なく沈みかけました。そしてとう／＼私たちの星から、最後に射出した閃光せんくわうに打

たれると、そのまゝ氣懶けだるく、大空を斜なめに飛び降つて、ラベスクラットと云ふ、怖おそろしい幻影げんえいの魔女が支配しはいする、魔の海に墮おち込みました。

私はこの不思議な天界てんがいの現象げんしょうに驚おどろきました。氣を取り直して、高殿から降り、私の部屋に驅込んで、魔術の本を調べて見ますと、今や私の運命と結び附かうとして、流浪りうらうして居る人があります。その人の扶たすけを得て、私の望みなるシャグバットの毛剃りが、遂げられるのだといふ事がわかりました。そこで今度は、其の方かたを見附け出すのが大仕事です。そこで私は計畫を立て、先づ私の使役しえきして居る鬼を呼び出して、捜そう索さくにあたらせ、貴郎といふ青年がいらつしやる事がわかりますと、街からあの砂山へ一しよになつて、大事業を果して下さる御方と決めたのです。私は親鷄おやどりとなつて卵を生んだのです。生れた卵はかへります。あの迷妄まよはしの本もとのシャグバットを滅ほろして、名を遠國とんこくまで轟とどろかし、事績じせきは歴史に末永く芳かんばしく残る程の、大事業の成功者とおなりにな

るのは、貴郎を置いて他に無いのでございます。』

シブライは、つくづくヌーアナが言葉を聞いて、自分は大成功者の天運を授つたものと覺つたので、駝鳥のやうに胸を張り、孔雀のやうに傲つて叫びました。

『あゝ、ヌーアナ、ヌーアナ！ ほんたうですか。いやきつとほんたうに違ひない。

私の生れた時、占者達が占つてくれた占も、今の貴女の言葉とぴつたり合つてゐる。さればさ、私は疾くから凡人ではないのだ。天道の御眼鏡で選ばれた英雄だ。』

シブライはもう有頂天です。未だ出陣もしないのに、はや凱旋の祝ひ酒に酔つた人のやうです。ヌーアナは一寸顔をしかめて、

『貴郎には、その調子に乗る、たつた一つの悪い癖があります。先きに鞭うたれた痛さを、もう忘れたのですか、大事業には大試煉がともなひます。』と言つてなだめ、現在の責務に、心向けさせようとしても、ヌーアナには暫くは力及ばず、今や彼は、浮きくして、虚榮の風に飛ぶ羽根そのものでした。

そこへ、フエシナヴァット宰相がはいつて來ました。彼は今、公證人に御馳走し、口止金を握らせて歸した所であります。そして、この有様を見て呼ばはりました。

『これく、お前がたは、そこでみえを切つて、何の芝居をしてをられるのぢや。お前方はもう、仕事に取りかゝる準備が出來ましたか。その第一歩をどう運ぶかよう談じ合ひましたか。』

『お父様、まだどうにも運びがつかまません。どう運ばせようといふ相談も、未だ致さないでございます。』とヌーアナは、しをれかへつて答へました。

『今まで話し合つて居ながら、少しもそれを話し合はないのか！ わしを御覽、公證人を味方に附けて、口止金を握らせて、當分約束を祕密にしてもらふことにし、それから許婚の保證に立つた者共の、うるさい評判を拒ぐ爲めには、彼等に旅費をやつて皆遠くラウム國へ追拂ふことにした程ぢや。それだけの事をしてしまつてゐるのに、一體お前達は、何をベチャクチャしゃべつてゐたのぢや。ペルシャのシャペシ王が、

大工の棟梁とうりやうギビルを、てひどく罰した話を知らんと見えるな、お前達は！』と宰相は言ひました。

『して、其の話はどう云ふのですか、お舅しゅうとさま。』
と、そこでシブライがたづねました。

四 ペルシャ王が大工の棟梁とうりやうを罰した話

そこで宰相は、次のやうな話を語り出しました。

昔ペルシャの國で、シャペシといふ王様が位につかれました。シャペシは、大それた賢明な王様でしたので、人民をよく治め、國を盛んにすることに、いろ／＼心をくだいて、夜晝そのことばかりに一生懸命でした。

さて王様は、或日から思はれました。

『どうも、わしの國の人民は、口先ばかりが達者で、仕事といつては、いつものろのろしてゐるし、ちよつと町へ出て見ると、何所も此所も、わい／＼いつて人が集つてゐるので、何をいそがしさうに、騒いでゐるのかと思ふと、ただ途方もない、おどけ

た空談をベチャクチャやつてゐるばかりで、まるでねぐらにはいる前の雀のやうぢや。そのくせ、町には活氣がなく、きたなくて、人民共と云へば、皆ぼろをさげて、飢じさうな顔をしてゐる者ばかりぢや。……これは何かの折に、きびしく戒めて、もつと勤勉ぐせをつけてやらなければならぬ。それにしても、仕事を與へてやらなければ、働かうと思つても働きやうもないだらうし、従つて、いつもじめ／＼した國內の不景氣を、除くことも出来ないわけぢや。』

と王様はかう思附かれたので、即位式を派手に取り行つて、それから宮殿造營といふ、大事業を興されました。そして働いた者には、王様のお藏から金銀を取出して、どし／＼與へることになさいました。

王様はこの宮殿造營を、大工の棟梁キピルといふ男におまかせになりました。そして國中の職人を集め、遠近から澤山の材料をあつめて、盛んな工事が始まりました。工事が始まつてから、一年たち、二年たち、三年も暮れましたが、未だ基礎工事も

ろくろく出来てゐない有様でした。

王様は、腹を立てて、わしの人民共は、何といふなまけ者であらう。かうして仕事をあたへてやり、働いた者には惜しげもなく、金銀をくれてやるやうにしてゐるのに、仕事らしい仕事は、ちつともしてゐないぢやないか。これは何とかして、きびしく懲しめてやらなければならぬ。——とかう思はれましたので、ちやうど四年目の或日突然、家來を引きつれて、はる／＼と工事場へ行幸せられました。

キピルといふ男は、當時のペルシヤ氣質の代表者といつたやうな男で、働くのは嫌ひ、おしやべりが大の好きといふ男でした。王様がおいでになつた時、ちやうどキピルは材木の上に腰かけて、いつも得意の武勇談の一席を、喋々と夢中になつて辯じ立てて居る所でした。そして大勢の職人達は、棟梁が棟梁ならと、いゝ氣になつて、そこらあたりにごろ／＼寝轉んで、棟梁の話の聞いたり、居睡つたりして居ました。それはちやうど一人の牧人が、數千の羊を野に放つて、見張りをしてゐるやうな有様で、

突然その場に臨まれた王様は、

『おう、これはこれは、わしは忙しい工事場に來たのではなくて、ねむたげな羊が草を食つてゐる、牧場に來たやうぢやわい！』と嘆息せられた程でした。

さて王様は、キピルに申されました。

『こりや、キピル！ 新しい御殿の案内を頼むぞよ。わしは、さぞかしりつばに出來たであらうと、たのしみにして來たのぢや。』

キピルはわれに返つて見ると、そばには、いつの間にか王様が來られて、立つて居られるので、びつくりして、しどろもどろ途方にくれましたが、四年もかゝつて、未だ出來上つてゐませんとも云へないので、苦しまぎれに出來かせをしゃべつて、何とか頓智で助からうとしました。

『陛下、御殿はこゝでございます。私が選びました、そもく此の土地と申しますは山紫水明、風光の明媚なることは、けだし國內第一かと存ぜられます。まつた、金城

湯地、要害の堅固なることは、古今の名高い王城にも過ぎて居ります……』

『こりや、キピル！ その自慢はあとにして、出來上つた御殿の中を、見せてもらはう。そして、其の方の手際のすぐれた所を、一見したいものぢや。』

キピルは仕方なしに、

『仰せかしてまつてござります。』と言つて立ち上り、まだ建て切らない廣間や、屋根のない部屋々々や、半建ての塔や、草ばかりの庭園やらを、案内して廻ることになりました。

王様は家來を引き連れて、見て廻られ、始終にこくして、どうした事か所々立ちどまつては、おほめになりました。

——これは申分ない技巧ぢや。

——そちの勤勉は覺えておいてとらすぞ。

キピルは恐縮し、其の度ごとに、冷汗をたらく流して、喘ぐやうに歩きました。

やがて、うね／＼した欄干をたどつて、大理石を疊んだ臺地にのぼると、王様はあほせられました。

『キピルや、其の方の忠勤の程をめでて、余の先に立つて、歩くことをゆるすぞ。』
キピルは、

『身にあまつた光榮に存じます。』とちづ／＼先に立つて行きますと、或所まで來ると足を止めて申しました。

『や、や！ 此所にはあいにく穴がござりまして、進むことは成りかねます。』

『いや／＼、どこにも穴などはない。安心して歩め。』

『どうつかまつりまして、なか／＼広い穴でござります。此所は、未だ出來上らない湯殿でござります。』

すると王様は少し氣色ばまれて、

『キピルや、わしの目には、どこもかしこも、ちゃんと出來上つてゐるやうに見える

ぞ。此の御殿の造營にかゝつてから、もう四年も経つたのぢやもの、出來上らぬ場所のある筈はない。余の命令通り、さり／＼歩まぬか！』と急ぎ立てになりました。

見ると、穴の廣さは數間あつて、底には深く水を湛へてゐます。キピルはぶる／＼戦へて尻込みしましたが、王様は家來に命じて、矢先を一齊に向けて、おどさせになりました。キピルは絶體絶命、駆け出して、忽ちドンブリと、水底深く落ちました。王様はいゝ加減にキピルを引き上げさせて、ぶる／＼齒の根も合はず慄へてゐる彼に向つて、かうお褒めの言葉を賜はりました。

『キピルや、此の湯殿の設計は、一段と面白いぞ。だしぬけに沐浴させるといふ工夫は、格別の想ひ着きぢや。ゆるすによつて、今後武勇談にしゃべり疲れた時は、毎日でもはいるがよいぞ。』

その次には、大廣間となるべき所へ、案内を命ぜられました。そして、
『キピルや、余は實に満足ぢやによつて、其の方を特に余の面前に於て、あの大理石

の椅子いすにかけることを、ゆるしてつかはずよ。』

『陛下、あの椅子は、御覽の通り、未だ出来上つてゐないのでござります。』

『左様なことがあるか、余の命にそむくと、打殺してしまふぞ、このおしやべり奴！』と急にもつての外の御立腹です。で、キピルはあわてて、

『いや〜、陛下、わたくしの思ひ違ひでござりました。なるほど、彼方あそこに椅子がござります。』と言つて、打たれるのが恐しさに、玉座の大椅子が、これから造つて置かれようとしてゐるあたりに行つて、もぢ〜と、椅子にもたれる姿勢しせいに脚あしや腰こしをまげて、ひたすら御意にそむかないやうにとつとめました。

王様はこれを御覽になると、カラ〜とお笑ひになり、

『そちが、その椅子を造つた褒美ほうびとして、今から晩まで、其の椅子にかけさせてつかはす。ぢやが、少しにても身動きする時には、余のあたへた名譽を、ないがしろにする者として、二十五本の矢を切つて放させるぞよ。』

かう申し渡されて、二十五人の弓を持つた家來を残して、そこを去り、御殿へとお歸りになりました。

家來達は、一せいに弓に矢をつがへて、キピルを取巻いてゐるので、彼は苦しくても、ちつとも體をくづすわけには行きません。家來達は眞面目くさつて、かうして居るのがくすぐつたくて仕方がありません。それで、押へて居ようとしても、クスリクスリと笑ひ出さずにはゐられません。其の度に、二十五本の矢の先はブル〜とふるへ、キピルの方から見ると、今にもそれらの矢が切つて放されさうで、死ぬ程腰が痛くても、ビク〜とも身動きが出来ず、まるで青銅の像のやうに、しやちこ張り、噴水かんすいの人形のやうに冷汗ひやあせを流して、やがて西山へ日が傾くまで立ち續けてゐました。

シャペシ王は、この他、次々に巧妙なお仕置の法を用ひて、キピルをお罰しになりました。そこで世人は、シャペシ王の賢明を稱へ、奇抜きぼつな抜け目のない其の刑罰けいばつの法に、怖毛おびげをふるつて、これまでは役人共もキピル同様、おのれの舌を以て建設者と心

得、ただ喋々と理窟をこねるばかりで、諸務が腐れる程に溜つてゐたのが、一度に流れるやうに運びました。そして、シャペシ王の領土には、おしやべり家と、なまけ者と、見え坊とが、一人も居なくなつたといふ事があります。

五 鬼神カラッズ

以上のやうな宰相の話が終ると、シブライは恐れ入つて、

『これは一本参りました。以後はきつと慎みます。』と眞面目に誓ひました。そして、きつぱりと叫びました。

『殿様、私は今夜のうちに駆け向かつて、シャグバットの寢込をおそひませう。彼奴があくる朝目を覺した時、自分の頭が坊主頭になつて居たら、どんなに驚くでせう。』
『そんなことが出来るかな。』

『勿論です。貴下はまだ私の手並を御存知ないのです。』
すると宰相はからりと笑ひました。ヌーアナも笑ひ出しました。シブライは二人の笑ふ意味がわからずにゐると、ヌーアナが云ひました。

『シブライ様、私達は貴郎のお手並や、決心の程を、さら／＼疑ふわけではございませんが、シャグバットの頭を剃るには、なか／＼手数がかゝるのです。』

『つまり貴女が、彼の頭に植ゑたといふ魔法の毛筋の爲めですか。』とシブライがきき返しました。

ヌーアナも一口では説明が出来ず、どう言つたものかと思案してゐますと、

『まあ、ゆつくり談じ合はうぢやないか。』と、幾らか事情を知つてゐる宰相が、口を插みました。

『なう娘、第一困らせられるのは、お前があゝの僭越者の頭へ植ゑ付けた、例の魔法の毛筋“ぢや”。どう云ふ手段で彼に勝つたものだらう。』

『お父様、それは第一の難物ではございません。第一に困りますのは、ラベスクラットと申す魔の海の女王が、シャグバットの身邊に立て罩めさせる幻影です。その爲めに、彼の男に危害が迫つた場合、どれが正體だかわからなくなることでございます。』

『うむ、では「魔法の毛筋」は第二の難物ぢやな。』

『いえ、お父様、第二に困りますのは、人間の弱點でございます。その爲め長蛇を逸してしまつて、取返しがつかなくなる事です。これを企てる御方には、元來たゞ一度の機會があるばかりで、その機會に失敗すれば、もう永久に失敗したのですから。』

『わしはさうまでとは思はなんだが、では「魔法の毛筋」は第三の難物となるわけぢやな。』

『いえ／＼、第三は、その剃るといふ仕事のむつかしい點でございます。それには、鋭さ、硬さ、切れ味にかけて、天下無雙の靈劍が手に入らなければなりません。さうでなければ、並の刃物は受け附けない魔法の毛筋もろとも、シャグバットの頭に生えた亂髪を、剃り落すわけには參りません。』

宰相は一部始終を聞いて、

『これはわしらの力に及ばないのではないか、仕損ずれば恥かくばかりぢや。』

と早くも嘆息するのです。ヌーアナはシブライの方に向つて、
『復讐、功名心、愛と、この三つの力に勵まされる貴郎も、この大勝負には、たぢたぢ致されはしませんか。』

『ううむ、聞いて見ると、成程危い仕事ですね。』とシブライもうめきました。
すると、ヌーアナは彼の顔をやさしく見まもつて、

『シブライ様、貴郎にはこの大事業をお果しになるだけの、資格が備つてゐると、私信じますわ。貴郎程の勇氣があれば、きつとやれ徹せます。先に復讐と功名心とのみで、あれ程の御奮發が出来たとすれば、今度はそれに、私に對する愛といふ力が加はるのでございますもの。』と言ひ、更に言葉を續けて、『ねえ、それについて、相手を敗る魔術と、護符と、毛剃に使ふ名刀でございますが、……もし私が、魔女の幻影でも、魔法の毛筋でも、ひとたまりもなく、ちやうど利鎌に逢つた夏草のやうに、刈り取れるといふ、寶劍を存じて居るとしたならば、どうぞでございます。』とにつこりしま

した。

『ヌーアナ、ヌーアナ！ 其の劍の所在は何處か……』と二人は同時に叫びました。

『所在はクウシ山のアクリスと申す所で、アクリスの七人兄弟が、晝夜それを研ぎすまして、冒険者の來るのを待つて居ります。誰でもそこへ參る事の出來た者に、其の劍を使ふ権利がございます。しかし、その途中の障碍となる陷穽は、沙漠の蟻地獄の穴程も多うございます。それらを切り抜けて、アクリスへ着くことが出來ますれば、志す敵を倒すまで、その劍が借りられるのでございます。ですから「事業の劍」といふ名が附いてゐます。昔クルージスといふ怪鳥が世界に現れて、その爲に人類が滅亡させられようとした時、あの兄弟の父親がその怪鳥を斬つたのも、實はあの劍を使つたのでございます。お父様、その劍を手に入れるやうに、致さうではございませんか。』

『さすがはわしの軍師ぢや。智慧者ぢや。してそれを手に入れる謀はどうぢや。』

『お父様も御存知のやうに、私は可なり魔術が使へます。それを使つて、今のやうな妾にもなつてゐるのです。又鬼神を使つて、一息に十と一色の術も致します。これがシブライ様に寶劍をお取らせするのには、随分お役に立たうと思ひます。さてアクリスへ參りますには、三つの護符が要ります。一つは沙漠の向うの嶺を走る流の中に、バラビットと申す泉が御座いますが、その泉の水を、瓶に汲取つて持參するのです。

又一つはメリスタンと呼ぶ牧野に、ガラヴェインと申す荒馬が居りますが、その尻尾から數本の毛を抜取るのでございます。もう一つは「魔の海」の巖の上から、「光の百合」といふ花を根こぎにして、アクリスへ持つて參り、ガルレヴァツズといふ白い羚羊にやるのでございます。この三つの護符が手に入りさへすれば、途中の妨げを難なく退けて、アクリスへ參つて、寶劍を借りる事が出来るのでございます。これから私は、出来る限りの智慧を働かし、變化の術を盡して、シブライ様をお助け致しますせう。これまで劍を求めて、ラベスクラットの領地を通り、アクリスへ參つた方々は、人

間の心の弱點の爲めに、皆牛や馬の姿になつたり、冠を着けた猿になつたり、怪鳥の卵で出来た橋の下へ落ちて、怪鳥の餌食となつたりしてしまひました。しかしシブライ様には、自然にそなはつた徳がおりますから、きつと成功なさらぬ筈はないと信じます。』

シブライは、叫んで言ひました。

『貴女のいひつけならば、私は水火の中へも飛込みませう。その劍を得て大事業を果したい一念が、私の胸には焰となつて燃えてゐます。』

ヌーアナは、シブライの勇氣をほめ、

『さあ！』と言つて、彼の周圍に線を畫き、口中で呪文を唱へますと、線は薄緑の火焰の輪となります。同様の輪を父の廻りにも引き、その圓線の上に、重ねていろんな呪符の奇妙な文字を、墨で以て描きました。次ぎに彼女は唸るやうな、咽ぶやうな聲で呪文を繰返しては、朱墨を取つて室の一方の床を染め、其の上に白墨で、魔王エブ

リスの名を書き、これにもやや長く呪文を唱へました。やがて、立ち上つた彼女の面は、頬は熱し、額には汗ぐつしよりで、

『お怖くはございませんか。』といふ聲も、せはしげでしわがれて居ます。

『神様を信ずる上は。』

『貴女を信ずる上は。』

と、二人は固くなつて答へました。

『いま私の使者の、悪作ものの鬼神を呼び出します。少し荒れますが、貴下方に害は致させません。』

『鬼では眞實の助けとはなるまいがな。』

『お父様、悪に強いものは善にも強いと、申すではございませんか。どうぞ私におまかせ下さい。』

ヌーアナはかう言ひながら、耳を欬てて、遠方の物音を聞かうとするやうでしたが

『さあ、お二方共、両手でお口をふさいで、圓の中からは、ちよつとも出てはなりません。御命にかゝりますよ。』と叫びました。

二人は口を押へて、彼女の爲す様を見まもつて居ると、ヌーアナは、口と耳とのみを残して、亞麻布で顔をくるくつと巻いて、水瓶の水を取り、祕法を修しながら、頭から足まで全身へ注ぎます。そして、又じいつと耳をすまして、床に身をかゞめ、唇を板敷にあてて、

『カラッズ！』と呼びました。かく呼び立てること七度、彼女はその度毎に嘔をしました。と忽ち呼び出しに應ずるやうに、ごうくと雷鳴は起り、大厦は動揺して、渦巻く霧と煙とで、部屋中一ぱいになり、にやごくといふ猫の鳴聲がするかと思ふと、朱を塗つた板の間がぱつと裂けて、樺色をした猫が、背を高くしてぬつと現れました。

『カラッズ、その姿は何です！ 役に立ちません。』とヌーアナは、にらみ付けて叱る

と、猫は變つて豹へうになり、黄色い火のやうな眼をさらさらさせて、今にも飛び付きさうです。

『カラッズ、其の姿は！ 役に立ちません。』

とヌーアナは、地團ぢだん駄ふんで又叱りました。

豹は變つて大蛇となり、數尋すひろのとぐるを巻き、しゅうく音立て、口から毒氣を吐いて居ます。

『カラッズ！ 早く變らないか、さもないと、魔王が許されて天國へ入る日まで、今の身分にして置きますぞ！』と彼女はますく腹を立てて罵りました。

と大蛇は消えて、見るく怖おそしい鬼神ぎやうせんの形相となり、體は暗々と落雷にこげた一本杉の如く、額ひたひに赤筋の皺しわを刻んだ、火の髪、朱の耳の、竅あなに落ちたらんくたる狼の眼をした、悪鬼となりました。

『何の用だ！ このにつくい巫女みこめ！』と鬼は叫びました。



『お前に、仰せつける用がある！』

『どんな姿になればよいのだ！』

『この天邪鬼あまのじやく！ 驢馬ろばにお成り、背中に二人乗れるやうな。』

『不實女ふじつをんなめ、何時までおれを使つて悪計たぐらみするのだ。おれは睡ねむつてゐる間に、あの魔法の毛筋を抜かれた爲め、手前などの用を足してゐるのだ。……そこでおれを見て居るのは誰だ！』

『一人は宰相のフェシナヴァット殿。一人はシラッツのシブライ様。シャグバットの毛剃りをすべき天運を持つたお方。私と許婚いひなづけでいらつしやるのだよ。』

これを聞くと、悪鬼は燃えさかる炭火たんくわのやうに怒つて、黒煙の息を吐き、シブライの方へ一步踏あしふみ出して、手にかけてやうとします。ヌーアナは急ぎ、先きに引いた圓線ゑんせんに息を吹けば、二つの輪は白焰はくえんとなつて、人の背丈程の高さに燃え上りました。すると鬼神はうしろへ立ち縮すくんで、猛烈な嚏くしゃみをやり出しました。そして折腰をれごしになつて苦

んでゐます。

『カラッツ、お前と口論しても始まらない。私がこゝへ歸つて来るまでお待ち。』

かう言つて彼の女は、一たん部屋を立ち去りました。あとに宰相とシブライは、びくびくものです。それもその筈、鬼は赤くなつたり、青くなつたり、嚏くしゃみの合間に怖い形相かたやうさまでこちらを睨にらみ付けて居るのですから。二人は命のちぢむ思ひでゐる所へ、ヌーアナは金色の祕文ひもんが畫えがかれた、一つの革かわの鞍くらを手にして入つて來ました。

『これをお持ち！』と命ぜられても、鬼はまだぐづくしてゐますと、ヌーアナは左手ひだりてを開いて握にぎつた粉こなを、鬼の頭へ振りかけました。と鬼は急におとなしくなり、ひざまづいて鞍を受け取りました。

『よし／＼それで。驢馬になつて其の鞍を乗せて、市街まちの外に出て、待つておいで。』とヌーアナは更に命じました。

『畏りました。』と鬼はうめくやうに言ふと、悄然せうぜんとして姿を掻き消しました。ヌーア

ナはそこで、二人を取り巻く焔の圈を消し止めたので、二人は圈の外に歩み出て、今さら、かくも自在に悪鬼を馭し得る、彼女の通力の廣大さに、驚歎せずにはゐられませんでした。

六 パラピットの泉

さてヌーアナはいそがはしく立ち廻つて、身仕度をととのへると、シブライと共に父の宰相に暇乞ひして出で立ちました。郊外に來ますと、鬼はすでに驢馬に化けて、鞍を着け、椰子の樹かげの泉のほとりに立つてゐました。二人はこれに乗つて、沙漠の中央にと突進しました。あたりは、灰色の空の下に、無限に擴つたさらさらする熱砂の外には何物も見えませぬ。驢馬の速いこといへば、まるで宙を飛ぶやうで、小流れのほとりにも、椰子の樹蔭にも息休めもせず、ぐんぐん駆け続け、さしもの大沙漠も、やがて遙かに境界線が見え出して來ました。そして進むにつれて、その境界線は見る／＼高まつて、忽ち眼前に一大岩山が現はれました。山の麓で、驢馬はびたりと止りました。

ヌーアナは、今通つて來た沙漠の方を振り返つて、

『この沙漠で斃れてしまつて、バラビットの泉まで行けなかつた人は、これまでずるぶん澤山ございます。此所迄こられたのも、みんな神様の御加護でございます。』

と言つて、驢馬から下りて、先に立ちました。シブライも下りて、ヌーアナの後から前面の岩山を上りだしました。山を登り、谷を下り行く程に、ばつたり岩壁にぶつかりましたが、どうくるとどろく瀑布の側からよぢ登つて、あやめもわからぬ密林に入りました。日かげも通さない危路のそこには、旅人の白骨が物凄く散亂してゐます。うねくとした細路をたどれば、時には、行先も見えない眞つ暗闇に入り、時には、眼界廣く開けた岩角に立つこともありました。やがて又、一そゝ高い山が現れました。其の中腹より上は、層々たる密雲に入つてゐます。

『さあ、早くあの山に登りませう。あすこへさへ上れば、この驢馬がどんなに悪智慧を出しても、貴郎を害する事は出來なくなるのですから。』とヌーアナは言ひます。

シブライは息もつかず、綠草の生えた坂路を登り、夕方近くなつて、漸く雪におほはれた頂上へと達しました。ヌーアナは、驢馬を木の根本に繋ぎ止め、其の耳へハアツと息を吹きかけると、驢馬はたちまち石像のやうに、動けなくなりました。又彼女は懷中から二つの絹の袋を取出し、その一つに息を吹入れて膨ませ、自分の體をすつぽりと其中に入れ、他の一つを彼に渡して、同じやうにさせました。シブライが見習つて、頸の所まで袋を引上げると、ぽか／＼と氣持のよい暖か味が、體へ廻つて來ました。

『此の驢馬を馭する、私の通力が續きさへしますれば、明日の正午までに、バラビットの泉の近くまで參られます。それから、貴郎が働きをなすつて、功名を立てられる番です。今後貴郎が試煉にたへて、一つ／＼功名を加へられる度に、貴郎の力は増して來ますが、夢にも心驕つて、ゆだんしたりなさらぬで下さいね。』とヌーアナは言ひました。シブライは、決してそんな心配は要らないと誓ひました。

翌日彼が眼を覺した時、はや大きな太陽が半分顔を出してゐました。ヌーアナはまだ安らかに眠つてゐます。と見ると驚いたことに、驢馬が、後半身は未だ石のやうですが、前半身はすつかり蘇生して、すごい眼を光らせてゐることでした。彼はあわててヌーアナを呼び覺して、その態を指しました。彼女はびつくりして走り寄り、驢馬の耳を掴んで、その顔に息を吹きかけると、じたばたしてゐたのが、急におだやかになりました。

『お日様が出さらないうちに、貴郎がお目ざめになつて、ほんたうに仕合せでございました。もう少しで私の魔術が解けて、この鬼が逃げてしまふ所でした。』

ヌーアナはかう言つて喜び、二人は驢馬に打ち乗つて、又前進しました。そして、とある洞窟の前に着いた時、彼女は驢馬を止め、

『私はこゝでお待ちしてゐますから、貴郎はお一人で、この瓶を持つて泉へいらつしやい。』と言つて、いろ／＼と泉の水を汲取る注意を與へて、彼をはげましました。



『道は一本道です、お急ぎなさい。』

山に登るシブライの姿は、早くも切つ立つた岩角にかくれました。ヌーナは其の岩角を目標に眼をそゝいで、一心に待つてゐました。太陽は遅々として彼女の頭上を過ぎ、やがて向うの山の端に沈んだ時、月光きらめく遙か彼方の、嶮しい岩角を、飛びつ滑りつしつゝ来る人かげが見え出しました。やがて彼女の前に降り立つたのを見れば、水を充した瓶を捧げ、元気な顔に神々しい光をたへたシブライでしたので、彼女は歡呼の聲をあげて歡び迎へました。そして、彼女はつくづくと彼の顔を打眺めて、云ふのでした。

『シブライ様、貴郎の第一の課程は、成功でございました。貴郎のお顔に新しい光が添へられたやうな氣が致します。此の調子ですと、貴郎はきつと最後の、劍の宮のあゝるアクリス迄、お達しになることが出来るでございませう。』

二人は驢馬に乗り、月光のさゆる山坂を下り始めました。二人の胸は嬉しさをど

つてゐます。シブライは楽しさうに話し出しました。

『私は貴女と別れてから、いろ／＼の不思議に逢ひ、それは短い間でしたが、別に一つの生涯を送つたやうな氣がする位です。あの泉の有様ですが——大理石で圍まれた泉の水は、冷く澄み切つて、空と地上の萬象が寫されて居ます。そのほとりには、娘達が泣いてゐたり、老人達が繰言をつぶやいてゐたり、青年達がものうさうに、水面に浮き上る水泡を、ぼんやり眺めたりしてゐました。』

私はこれらの人々は、失敗した人や、勇氣のない人達であらうと思ひましたので、よそ眼もくれず、貴女のおつしやつたやうに、瓶をしかと握つて、すぐさま飛び込みまつさかさまに沈んで行きました。水は世界の底まで届いてゐるかと思はれる程深くやがては意識もぼんやりして來て、息も苦しくなりましたが、全身の力を振つて突進し、もうだめかと思ひましたが、こゝぞと最後の一足掻きますと、その一瞬間に身體は底に達しました。やれ嬉しやと思ふと、不思議なことに、もう頭が水面に浮いて居

るのには驚きました。しかし其の證據に、御覽なさい、底に一面に光つて居た珠の一つを、ほら、貴女の爲めに搔き取つて来てあげましたよ。』

ヌーアナは、珠を押しいたゞき、ふと彼の傷いて赤くなつた手を見て、

『あゝ、貴郎もまさしく珠を搔き取る時、手傷をお受けなさいましたね。魔法の書に「血を流さずして、珠を彼の淵に探る者なし。」と書いてございます。貴郎はほんたうにえらい方でした。私の眼鏡に狂ひはありませんでした。』と言へば、

『いや、ヌーアナ、貴女こそ、實にかしい、世にまたとない婦人ですよ。』

とシブライも答へて、二人の間には未來の計畫について、いろ／＼と話の花が咲きました。ただ、カラッズの化けた驢馬のみは、如何にも不機嫌に、尻尾をびり／＼とふるはせて、二人を振り落さんばかりにして進んで行きました。

七 悍馬ガラヴェイン

山を降りて、麓の緑野に來ますと、ヌーアナは驢馬に向つて、新しい命令を與へました。

『さあ、カラッズ、よく風をかき分けて、夜通し驅けて、今夜の間にメリスタンの牧野までお驅けよ。』

驢馬は四方へ向き直つて、一々風をかき、一つの方向を定めると、だつと驅け出ししました。野や丘を越えて驅け續け、アラビヤ遊牧民の白い天幕の群る砂丘や、鏡のやうに滑かな湖水のほとりや、都市の城壁や、高い城樓の下を驅け抜け、又は渦巻く銀色の流を飛越え、青白い水泡の崩れる海岸などを飛ぶやうに過ぎて、青草に置く露が曉の新しい光にかゞやく頃、平和な日かげ暖かい、一望草緑なるメリスタンの牧野

に着きました。牧野に入れば百草の花咲き亂れ、清風のすぐる毎に朝露はきら／＼と光り、えもいはれぬ句は天地をこめて、そのすが／＼しさは、まことに此の世の極樂のやうでありました。

ヌーアナはしばらく景色に見とれてから、言ひました。

『こゝにガラヴェインが住んで居ます。大事件が世の中に起つた時、天福をさづかつて立つた英雄を、お乗せすることに運命づけられてゐるのです。色は磨墨の如く、廣い鼻口からは息は火焰の如く、瞳は電のかがやくが如く、一たび足搔けば、雷電とどろきて、世界が揺れると申す程の、無雙の悍馬でございます。この馬を呼び寄せるには、戦の時の呼子を吹き鳴らし、捕へる時には、今差上げるこの麝香の袋を投げて、驅けて来る馬の蹴爪にあてなければなりません。さあ早く勇を鼓して、その馬を捕虜にして来て下さい。』

シブライは勇み立つて、牧野を駆け出しました。そして柔い芝草をふみ、色香に充ち充ちた五彩の花を分け、見おとすまじと四方に目をくばつて進んで行きました。行手には數多の小鳥が飛交ひ、枝もたわ／＼な花の房は、水晶をとかした小川に照り映えて、その美しさ、えもいはれない夢にさそふやうな世界を、しばしまよつてゐますと、突如として一聲、高いいなゝきが起りました。すはと彼が瞳をこらしめますと、遙か彼方の流れの岸に、ガラヴェインが正に頸を伸して、流れに水飲まうとして居ます。それは銀蹄の黒馬で、あくまでたくましい全身の曲線は、一瞥しただけで千古の逸物であることがわかります。

シブライは掌を圓くしてビイツと呼子を吹きました。と馬は首をもたげ、呼子の鳴つた方に耳を立て、一聲これに答へるやうにいなゝきました。が、忽ち鬣を振り、さつと此方に向つて驅けて來ます。彼はその近づくのを待つて、ここぞと麝香の袋を投げますと、狙ひあやまたず蹴爪にあたつて、馬はどうと倒れ、鼻息荒く叢の中でもがいてゐます。シブライはすかさず驅け寄り、しかと額髪を掴んで、そのらん／＼

たる兩眼の間に、人さし指で新月の形を畫くと、馬はもがきをやめて立ち上り、嘘のやうにおとなしくなつて、シブライの乗るにまかせました。

シブライはひらりと打乗るや、踵で馬を責め立て責め立て、花の牧野をとらくと飛ばせました。これを眺めたヌーアナは、歡呼の聲を上げ、

『おい、よくぞなさいました！ これで二番目の功名も貴郎のものとなりました。』と絶讚して、早く馬から下りるやうにと命じました。が、シブライはその聲を耳にも止めない様子です。彼女があせつて再び叫び立てますと、

『いや、私は未だ降りない。此の馬の乗り心地はどうだ！ 正に天馬空を行くとはこの事だ。さあ走るだけ走れ、こんな愉快なことはない。』と、馬と一しよに高らかにうそぶきました。

ヌーアナはきつとなつて、嚴かな聲で言ひました。

『あゝ、貴郎には魔がさしました。それでは、他の人と同じ運命になるばかりです。』



その馬に二度と拍車をくれたが最後、紅の谷と申す恐しい所へ馳せ去つて、騎手を崖の下に振り落すのです。穴の中のうづたかい屍と白骨とは、貴郎同様ガラヴェインに乗つた人々の、運命の果なのですよ。』

シブライは此の言葉にも、馬耳東風、調子に乗つて、自分の力を試して喜んでゐます。

『何といふ癡者です！折角の大望を慢心の爲めに、打ち毀してしまひますよ。その爲めに亡くする、幸福や権力の事を考へて下さい。』

かう彼女が躍起になつて叫んでも、彼は電光のやうに疾驅する黒駒を驅け散らしてもう有頂天で、何事も耳には入りません。

『もう申してもだめです。それでは手後れにならないうちに、私と力を競べて見せう、たとひ共疲れになりましても。』と威丈高に叫ぶと、振り返つて驢馬に言ひました。『カラッズ！正體にお成り。』

すると驢馬の姿は忽然と消えて、恐しい真黒な旋風の柱のやうな、悪鬼の姿が現れて、わめきました。

『何だ、女め！ 用といふのは！』

『ガラヴィンに乗つてゐるあの男と、かくらべして、抛り投げて御覽！』

鬼は喜んで、一聲高く、おう！ と叫び、馬上のシブライをねらつて、身をかゞめさま大手を擴げて、むんづとばかり掴み取り、くるくると廻して抛り投げました。シブライの身體は、輪を畫いて空中高く抛り上げられましたが、幸ひ遠く沼の中に落ちました。彼が漸くそこから這ひ上つて見ると、鬼はガラヴィンに跨り、黒焰を渦巻かせて疾驅し、忽ちの間に影を没してしまひました。シブライは茫然として、夢からさめたやうに、はじめて自分のおろかな所作が恥しくなり、ヌーアナに合せる顔もなくしをれかへつてゐます。ヌーアナは側により、

『さあ貴郎、顔を上げて、降りかゝつた災難が、どんなものか御覽なさい。カラッズ

もガラヴィンも、天地のはてまで逃げて行つて、もう私が、一瞬間に十と一つの魔術を使つても、届かない先へ驅け去つてしまひました。その上、今後もカラッズは、思ふさま邪魔立てして、私達を困らせますこととせう。……それにしても、これで貴郎のお弱い事がおわかりになつたでせう。』と云ひ、更に言葉を改めて、『けれども私はほら御覽なさい、ガラヴィンの毛を三本抜き取つて置きました。これだけはせめてもの幸せです。』と言つて示した毛は、青光りがして、あたかも生きてでもゐるやうに、うね／＼と縞れ振れ、ちやうど三匹の青い小蛇を見るやうです。

『さあ、右の手頸を出してちやうだい。』かうヌーアナは言つて、出させた彼の手頸にこの三本の毛をしかと結へ、得意氣にかう言ひました。『上手な建築師は、こはれた個所の繕ひも出来ねばなりません。これで私の豫想通り參ると想ひます。私は貴郎の御運を信じますから。』それから又、

『シブライ様、何か申して置かれる事はございませんか。先つきの失敗で、私達はこ

ここで別れ別れになつて、手一ぱいづつの仕事をしなければならなくなりました。それが運命でございます。』

シブライはびつくりして、懇願こんがんしました。

『それは大變です。困ります。私は貴女の助言がなくては、何が出来ませう。行つてしまはれては、此の企くはだても到底だめです。』

『では私のやうな者でも、そんなに力になると思召おほしめして下さいますのですか。』

『私は貴女を、世界に二人とない婦人だと尊敬してゐます。恐らく私は、未だ貴女の假面しか見て居ないのでせうが、貴女は賢いばかりでなく、内面からともすると發する、美しい素振そぶりさへわかるやうな氣がします。ちよつとの間も、私は貴女のお姿を見ず、お聲を聞かすには居れない氣がするのです。』

するとヌーアナの顔から、ぱつと華やかな光がさし、いそ／＼として言ひました。

『私はどうしても參らなければなりません。それにつけても、私をそんなに思つて下

されば、今後を安心して嬉しくお別れすることが出来ます。私はこれから參つて、カラッズの悪企かんみを監視しなければなりません。ずるくて執念しゆねん深いあの鬼には、一刻のゆだんも出来ません。ではお別れ致しませう。こんどお逢ひする時には、私を見違へぬやうに願ひ致しましてよ。』

『さうして私は、何處へ行けばよいのです。』

『オールブへいらつしやい。真直ぐに。』

『どうしたら行かれるのです。私には其の方角さへわかりません。』

『それはやさしいことです。貴郎の懐中かぶとのバラピットの瓶の水を、途々みち石なり草なりに、一滴づつ落して聞けば、みな答へてくれます。』

シブライがなほもさかうとする時、ヌーアナは彼を抱へて、その眼にふつと息を吹きかけますと、彼は眼が見えなくなり、よろけて岩に寄りかかりましたが、そのまゝ疲れ果てたやうに、こん／＼と眠り出しました。

八 もの言ふ鷹

シブライが眼を覺した時、初めて自分一人である事に氣が附きました。いつか日が暮れて、月は低く牧野を照してゐます。もろ／＼の花に置く露は、美しくきら／＼と光り、花の香はあまねく野面をこめて、時々夜鳥の聲がします。彼はまだ夢見て居るやうな氣持で、この物音一つせぬ静かな光景に見とれてゐましたが、ヌーアナの言つた言葉——オールブの事や、懷中の瓶のことなどが、次第に心に浮んで來ました。そこで彼は、懷中から瓶を取り出して、こゝろみに其の一滴を、今まで自分が凭りかゝつてゐた岩の上にならして、

『オールブの都の方角は？』とたづねてみました。すると忽ち、岩の中から深い沈んだ音樂のやうな聲が起つて、

『月の影さす方へ行け！』と答へました。

そこで彼は、一際高い岩の上に驅け上つて、牧野を見渡しました。月の影はほのかな陰影をなして、向うの沙漠をよぎつて遠くへ走つてゐます。彼は岩を降りて、陰影の差し示す沙漠の方へと、一生懸命に歩き出しました。沙漠の中で夜は明けました。また瓶を取り出して、足許の小さい草に一滴を注ぐと、草の中に聲あつて、

『日の影さす方へ行け！』と答へがありました。太陽の陰影は、やはり同じ方向に地に長く布いてゐます。それを目標に道を急いで、時には棗椰子の樹蔭に休んで、泉の清水をくんで喉うるほし、希望は高く、意氣はあがり、を／＼しくも四日四晩の旅を續けて、海に沿ふたとある都會の門をはいつたのは、五日目の朝でした。市民は漸く目を覺した頃で、市街はすが／＼しく、海上はうら／＼かに晴れて、港に群る大小の船は、出船の準備いそがしく、ラウムや其の他の國へ運ぶ、鐵や、棗や、寶玉などの行李を、堆く甲板に積上げてゐました。

シブライは、この多くの船の中には、オールプへ行く船もあらう、どの船か早くわかれば、便船を頼まうと考へ、おゝ、さうだ、よし。あそこに噴水盤があるが、あれに、バラビットの水をかけて、もの言はせてやらう。と噴水盤に近付き、瓶の水をまいてきくと、水盤の中から、

『人間のゐる所では、口のないものにきく必要はない。』といふ聲がしました。シブライはいさゝか悲觀して、これはどうも、ちと素つ氣ないごあいさつだな。だが考へて見ると、なる程、人間のゐる所では、人間に訊いた方がよささうだ。と考へ直して、埠頭へ来て見ると、陸から一飛に飛び込まれる位近くに、船が列をなして投錨してゐます。彼は、さてどの船に聲をかけようか、神様の御意はどれにあらうかと、あの船、この船と、眺めながらさまよつてゐますと、突然彼の目の前に、水夫の服装をした男が現れました。

その男は、シブライをちらと見ると、急にあわてふためいて、恐れ入つたさまで、

『貴下様は、シブライ様でございませう。私共は早くから、貴下様をお待ち申して居りました。』とていねいに言葉をかけました。シブライは釣り込まれたやうに、

『私はもうそれ程名高くなつてゐますか。』と叫びました。

『それはもう、貴下様が、此所の土をお踏みにならぬ前に、ラツバ太鼓でおふれが出て、シブライ様と申し上げる英雄が、こゝからオールプへお渡りになる。そして世界に大革命が起るといふ事は、誰知らぬ者がない程になつて居ます。』

『では、ヌーアナが豫言した通りぢや。いよいよ、私は大事業の成功者たるべき、選ばれた人間である事がはつきりして來た。さては空飛ぶ鳥も、遠方から私を見つけて叫び、丘走る獸も私の近附くのを報じ、沙漠の風も私を歓迎する爲めに、歡呼の響きを上げて吹いたといふわけぢやな。』と言つて、例の輕はずみな、お調子に乗る悪い癖が出て、急に胸をそらして傲然と構へました。見知らぬ男はにたりとして、

『私はあの一番沖の、帆を張りかけた船の船長でございませう。無花果などの果物を積

んで、オールブへ参り、絹、香料その他の品物と交易いたします。」

シブライは、餘りに急の事情の變りかたに、まごついて居ますと、

『さあ、早く私の船に御召し下さい。ためらひは禍を生む本と申します。直ぐにもオールブへ出帆する筈でございますから。』と切りすすめます。シブライは暫くはこの街にとどまつて、市民の歓迎を受けて見たいといふ未練もありましたが、船長の巧みな言葉に従ひ、舢艫船に乗り込んで、本船へと漕ぎ着けました。彼が本船に移ると、待ち兼ねて居たやうに、船は帆を上げて、大海へと乗り出しました。

船中には、特にシブライの爲めに一室が設けてありました。彼はその部屋にはいつて見ると、寢臺の頭の所に、一羽の鷹がとまつてゐました。眼は紅玉のやうに赤く、嘴は利鎌のやうに鋭く曲つてゐます。彼はびつくりして船長を呼び立てました。船長はいつて来てこれを見ると、急いで自分の頭巾をはづして、鷹に投げかけ、走り寄つて取り押へようとしましたが、鷹はあちらの隅、こちらの隙間とすばしこく身を

かはして、なか／＼捕りません。船長は初めは大手を擴げて追ひ廻してゐましたが、じれて大いに怒り、劍を抜いて切らうとしました。と鷹はひらりと體をかはすや、猛然と船長の後頭部に飛び付き、爪で髪をかきむしり、嘴を伸して彼の眼をつつながら、

『カラッズー!』と一聲叫びました。

シブライは、この聲にはつとして、ひよいと船長の顔を振り返ると、それは悪鬼カラッズの顔でした。彼は仰天して立ちすくみ、心で、輕はずみに此の船に乗つた事を悔いしましたが、大海の上ではどうにもしようがありません。この時鷹は、カラッズの頭から、一本の髪の毛を抜き取りました。それが魔法の髪の毛であつた爲か、カラッズの體は急に鯨張り、全身見る／＼火中の銅の柱のやうに、眞紅に光り出し、轟然たる音響と共に、その灼熱した銅柱は、船の底まで突き抜けて、ガラ／＼と音立てて海の底へと沈んでしまひました。

シブライは神に感謝し、命の親の鷹を稱へて、しばし胸を撫で下しましたが、鷹が大急ぎで甲板へ飛び出したので、自分もその後には續きました。見ると驚いたことに、既に甲板は一面火の海になつてゐます。鷹は猛つて渦巻く焰の中を飛び交ひ、安全な逃げ場所を見付けようとあせつてゐますが、火焰は八方から襲ひかゝつて来て、今にも焰と煙にのまれてしまひさうです。シブライも同様、今や火は着物にも燃え附いて来たので、も早躊躇する場合でない、心に大悲のアーの神を念じて、眞逆さまに海へと飛び込みました。

彼が再び頭を波間にもたげた時には、船の影は跡形もなく、邊りは一面の闇で、ただ身體が巨浪に翻弄せられてゐることだけが解りました。彼はもう死ぬのだと覺悟し、いたづらに水面を手で打つてゐましたが、やがて力は盡き果て、過ぎし日の記憶も薄らぎ、一時も忘れなかつた大望へのあこがれも、無自覺の彼方へ消え、死にかゝつた魚のやうに腹を返して、やつと口だけ出して天を仰いだ時、彼は微かに耳のそばで、



翼の羽摺れの音を聞いたやうな気がしました。それから又、鷹の紅玉色の眼が、暗夜の遠火のやうに燦めくのを見ました。

鷹はシブライの上に舞ひ下り、嘴を彼の濡れた頭髪の中に埋め、髪のををついで、彼の頭を波の上にもたげ、静かに引いて行きました。一二丁運んで疲れては海へ落し、又直ぐ衝へては引きして、これを幾度か繰り返すうちに、シブライの脚が地に觸く程の浅瀬へ着きました。シブライは最後の氣力をしぼつて、小波を分けてからも磯邊へ這ひ上り、ひざまづいて神様に感謝したまでは覚えてゐますが、激しい疲れにどつと襲はれて、深い安らかな眠りに落ち入りました。

彼が目覚めたのはもう夜明けでした。遙か彼方には街があり、尖塔は朝日に輝き、山々の面は黄色に映えて見えます。人々は城壁や、塔の上や、市外の廣場をそゞろ歩きして居ます。彼は起き上つて人のゐる方へ行き、

『あすこに見える市街はどこですか。』とききました。するときかれた人は、彼の顔をしげしげと見て、

『貴方はオールブの都を知らないんですか。貴方の肩にゐる鷹でさへ知つてゐる筈ですが。』と言ひます。ふと見ると、なるほど鷹が肩にとまつてゐます。鷹は翼を焦がして、全身眞黒です。シブライは感謝を込めて鷹に言ひました。

『お前はほんたうに私にとつて命の親だ。なあ鷹よ、お前にたづねたい事があるが、答へてくれますか。』

鷹は承知したやうに、翼を振つて片目をまばたきました。

『私はあの都會へ行つても禍は起りませんか。』

鷹は又、前と同じ様子をします。

『私があ都會へ行つて、先づどの方向へ足を向けたら、希望が遂げられますか。』

かう彼が再び問ふと、鷹は忽ち肩を放れて高くかけり、見る／＼市街の一番高い塔の上に降り立つて、又直ぐ翔けもどつて來ました。

『あゝ有難う。お前が一番高い塔に降りて見せたのは、國王の宮殿へ行けといふことだらう。』とシブライが言ふと、鷹は翼をはたいて、合點がてんしました。そこで彼は、落着いて懷中からバラビットの靈水を取り出し、數滴すうてきを自分の唇にたらしめました。これはオールプ王の面前で、雄辯を振ふ爲めの準備であります。瓶の口を開けた時、鷹も肩から首を伸して、嘴くちばしを浸ひたしました。それから長い街を幾つも通つて王宮に着き、諸國の珍しい話を聞きえ上げたいからといつて、王様に拜謁はいえつを申し出ました。國王は元來珍らしい話が何よりも御好きでありましたので、早速拜謁をゆるされました。

シブライが、御前にまかり出ようとする時、鷹はさゝやいて、こゝに、もの言ふ珍しい鷹を御覽に入れます、とおつしやい——と言ひました。で彼は御前に頓首とんしゆしてものを言ふ不思議の鷹を御覽に入れ度いと呼ばはりました。しかし王様には鷹が見えないらしく、先づかうお尋ねになりました。

『そちの生國しやうこくはいづれか。』

『はつ、シラッズの生れでございまして、只今はシャグバットの都から参りました。』

『左様か、ではあの毛深い男は、どう致して居るか。』

『いつものやうに、身に深林を植ゑ付けてまかりあります。』

『それはけつこうぢや。近頃は余の國でも、シャグバットの風習に習ふことになつて昨日まで滞在してゐた床屋共を、笞刑ちけいを加へて追ひ出してしまつたわい。』

かう王様が仰せられたので、彼は心中大いに驚き、『前にはあれ程尊重された床屋ももう駄目だ！ これではシャグバットの頭が剃られる迄は、この形勢けいせいは直るまい。』

と考へて、思はず嘆息をもらしました。と、王様は目ざとくそれを見とがめられ、『其の方が今、何やら嘆息いたした、その理由わけを語るがよい。』と仰せられました。

シブライは恐れ入つて、

『あゝ、時世をしろしめす 御發明なる陛下、只今私が嘆息いたしましたのは、昨日御追放にあつた床屋の身の上と、古いにしへ、床屋兼豫言者でありました、ルトム・ドルム

との運命を引き較べたからでございます。』と答へ、一つは國王の迷妄まよひを啓ひらくが爲め、又一つは床屋の爲め、萬丈の氣焰を上げるべく、彼の床屋創業の元祖で、いとも偉大なる聲價を示した、ルーム・ドルムの一代記を、言葉巧みに調子面白く、いとも奇抜な辯舌で、たう／＼と語つてのけました。

九 妖姫グウレルカ

シブライが床屋の先祖の一代記を、辯じ終へた時、オールブ王は感心して仰せられました。

『シラッズの若者とやら、其の方の辯舌は、不思議に人を引き附ける。今の話を聞いて、余は昨日きのふ笞刑ちけいを加へて追放した、ババ・ムステーフアを可哀さうに思ふ。彼も確かシラッズの者だと申して居つたが。』

シブライは、ムステーフアの名を聞いて、胸つぶれ、自分の伯父はきつと、自分をさがしに此所へ來たに相違ない。と思ひ、『あゝ、それは私の伯父で……』と口まで出かけましたが、肩の鷹に止められて、口をつぐみました。鷹は又さゝやいて、

『今私は王様の眼に見えて居ります。それに王様が知らぬ顔して居られるのは、何か

怪しまれてゐるからです。早くこの鷹は豫言を申し上げますと、おつしやいまし。』
と言ひます。彼はその通りに王様に申し上げますと、王様は、
『では床屋といふものに就いて、豫言致させて見よ。』と仰せ出だされました。鷹は聲に應じて、

『大王様、床屋は今こそいやしめられ、例へば冬籠りする蟲か、泥の中に冬眠する鱈のやうに侮られてゐますが、やがては脱皮した蛇となつて現はれ、古皮を着た者を恥しめます。床屋は蛹として眠つてゐますが、蝶となつて現れます。小さい星として沈みましたが、時世が来れば、大きな星となつて昇つて來ます。』

鷹がかう一生懸命に豫言してゐる暇に、王は一人の家來に何やら耳打ちせられました。すると家來はさがつて、盥と石鹼容れと、剃刀とを捧げてもどつて來ました。シブライはこれを眺めると、隠してゐた床屋の本性が現れ、剃刀を揮つて見たさに跳び上り、手の舞ひを抑へようにも抑へられなく見えました。この時王は大音聲、

『されば余が察した通りぢや。己が習慣は時には己を反切るとは古人の言。どうぢや其の方は床屋であらうがな、眞直に申せ！』

シブライは、オールブ王に看破られ、膽をつぶして驚きました。が此の時鷹は又彼の耳にさゝやきました。

『髮剃道具にものを言はせて御覽に入れます。と仰しやい。』

シブライは氣を取り直し、その通りに申し上げますと、王は疑はしげに笑つて、

『もしそれが嘘いつまりはりであるときには、そちは二度と故郷を見られまいぞ！』と仰せられました。

シブライは鷹に教へられ、ひろげた髮剃道具の上に、こつそりバラビットの水たらし、ものを言へと命じました。すると髮剃道具の中から、がやくとわけもわからない言葉が、一時にほとばしり出ましたので、國王はびつくりして、

『鷹はさて置き、髮剃道具にもの言はせるとは、一段と不思議な藝當ぢや。これでは

床屋といふものは、捨てた職業でもないかも知れぬ。それにしても、その云ふ事に意味が通じたならば、更にけつこうぢやなう。』と云はれました。

鷹は道具の方へ飛んで行き、其の上に輪を畫くと、剃刀と刷毛ブラシがついと立ち上り、きい〜聲を張り上げました。

『シヤグバットの頭は剃らるるが天命。これを剃る者の名は、シブライ・バカラッグ。』
『これ〜、刷毛と剃刀、それからどうなるのぢや。』と、王はますます驚いて、夢中になつて訊ねられます。すると、倒れた刷毛と剃刀は、又ついと立ち上つて、きい〜聲を張り上げました。

『シブライ・バカラッグと、床屋の族輩ヤカラは、世の尊敬を受けます。シヤグバットと、シヤグバットにならふ者は、世の侮辱おじやくをかうむります。』

『よし、もうわかつた。前以て起る事件にそなへ、世に先んずる者は、賢明と申すものぢや。余は髪を剃つてもらはう。さうぢや、ぜひとも剃つてもらはねばならぬ。』

と王は仰せ出だされました。

『さあ、早く早く。』と鷹はうながすので、シブライは髪剃道具ちつ取つて、懸命に王の頭を剃り始めました。腕の互まえは十分、忽ち石鹼の泡の中から、一つの青頭が現れ出ました。それから、われも〜と例にならふ廷臣共の頭を、片つ端から一人残さず剃つてのけました。すると一同は、人に笑はれやしないかといふ懸念けんねんで、一寸怖氣おぢけを催しましたが、お互の頭を見上げた時には、心も軽くどつと笑ひ出しました。そこで國王は、嚴かおごそに、命令を發せられました。

『早く布告ふくれを出せ！ オールブの市民に、皆余等の例にならふやうに致させよ。さうすると、笑ふ者がかへつて笑はれることになるぞ！』

それから王は、シブライに向はれ、

『其の方の鷹は、如何程の黄金にてゆづるか。』と訊かれました。

『王様の御藏みくらの、貝舟かひぶねのお寶とおかへいたしませう。』鷹はシブライに教へて、かう答

へさせました。王様はためらつて、

『それは餘り高値ぢや。あの貝舟は、余の姫が魔の海を渡つて、「光の百合」を守護する爲めに、是非必要の寶ぢや。もし百合の守りをおろそかにして、人にいためられる時には、以前に百合の守り番であつた、フェシナヴァットの娘ヌーナ同様、醜い姿になつてしまふのだから。……しかし其の鷹も珍しいものぢやなう。ものが言へるほかに、何の役に立つか。』

『困つた時の相談相手になりますし、凶事の豫言もいたしますし、それに魔法や幻術を破る通力もございます。』

王は遂に、『余に従いて參れ』とシブライに命じ、自ら先に立たれ、幾つものりつばな大廣間や大理石の架廊やを通つて、一つの地下室に降りられました。そこには、甲冑、刀劍、馬具などが、四方の壁に隙間もなく懸けつらねられ、華やかな絹の衣裳肩掛、帷帳の類や、支那の皿や、壺や、黄金の道具類が一ぱいに積まれてゐました。

そこで王はシブライに申し渡されました。

『此の中から、どれなりと好きな物を取つて、その鷹は余に渡せ。』

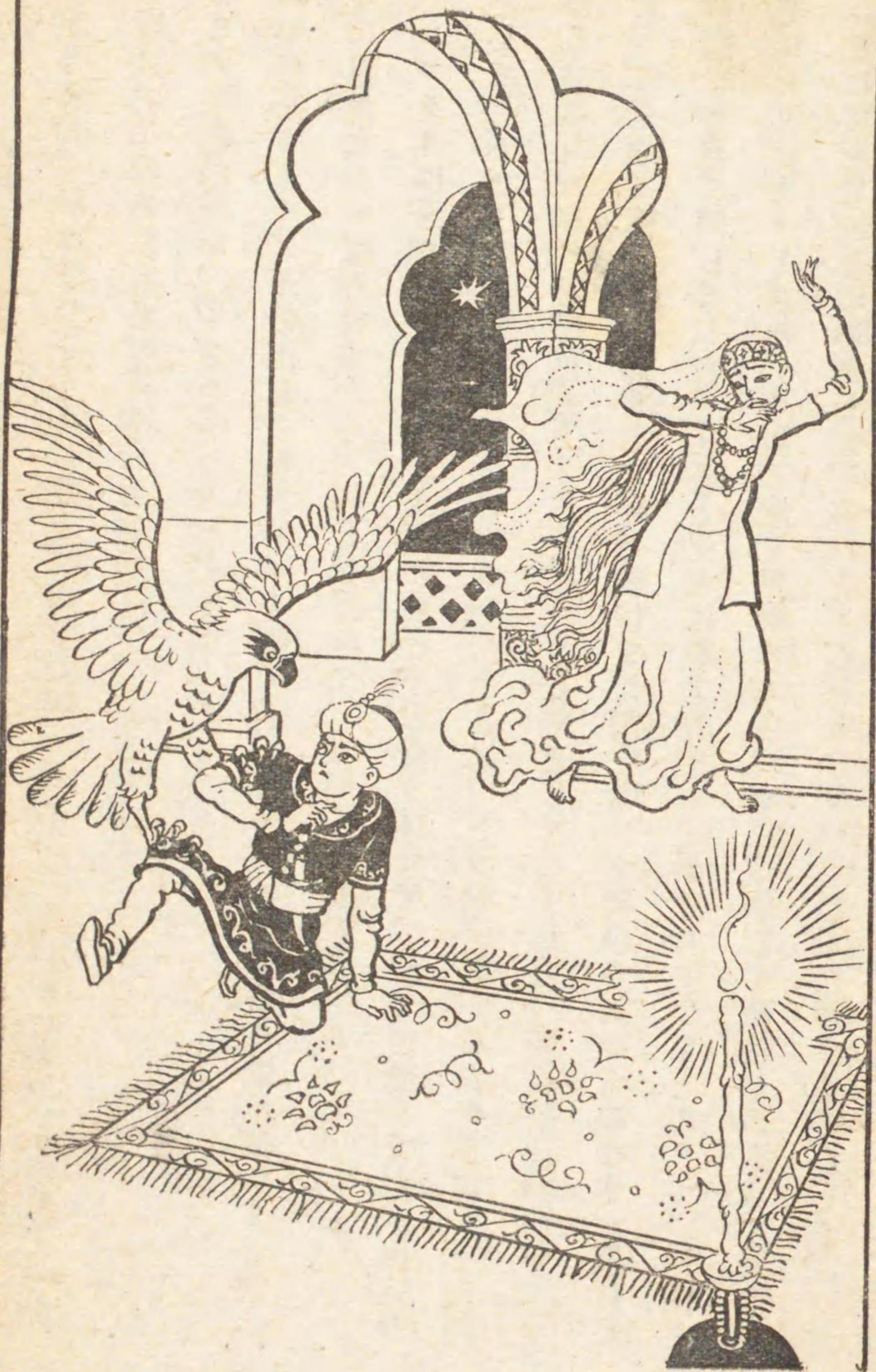
『いえ、貝舟のほかの寶とは、御取換致すわけには參りません。』

『こりや、此の品々には、みなそれ〴〵效能があるぞ。そこにある其の盃は、千人に飲ませても、少しも減らず、もとのまゝに酒は溢れるし、また其の外套ぢやが、それはサマルカンドの外套と申して、それを着れば姿がかくれてしまふといふ寶ぢや。其物とも、換へるはいやぢやと申すか。』

王様は立腹して恐い顔をなされ、果ては、シブライが承諾しない場合は、きつと彼の鷹を沒收した上、入牢申し附けるとおどされました。そこでシブライは、鷹の忠告を容れ、サマルカンドの外套と、千人の盃とを取つて、鷹を王様に差上げる事に決心しました。やがて交換はすみ、王様は手頸に鷹を据ゑて、王女の部屋に去られ、シブライも又設けの別室に退きました。

夜が更けてから、部屋の格子窓かうしに何か音がしたやうに思つたので、シブライが起きて覗いて見ますと、鷹が窓の外で羽搏はたいてゐます。驚いて窓を開いて中へ入れてやると、鷹は彼に、先の外套うはぎを着て、盃を持ち、宮殿をめぐつて、番兵共に酒を飲ませるやうに教へました。彼はその通りにして、酒を飲ませて廻りましたが、番兵共はなみなみと酒のつがれた盃が、眼の前に現はれるだけで、その持ち手が一向見えないので、不思議がりでしたが、それでも皆十二分に飲み飽きました。

それから鷹は先に立つて飛んで行くので、シブライも其のあとを附けて行くと、とある部屋には入りました。そこには美しい帷帳とばりが垂れ、中には黄金こがねのランプがともつてゐる、七彩の寶石のなごやかな微光が照り映えてゐるばかりです。邊りはひっそり静まつてゐますが、どうやら美しい王女の眠つてゐる部屋のやうな氣配けいがします。抜き足して進んで行きますと、青い小玉こたまを星屑ほしくづのやうに織り込めた、金の筐縁さくべり取つた青絹しとねの衾しとねを敷き、その上に一人の姫がふせつてゐるのが見えます。面は眞珠おもてのやうに白く



すきとほり、眉はほつそりと、無心に閉ぢた眼の上に、三日月を引き、そのあどけない唇は、二枚の紅ばらの花びらを重ねたやうであります。

この時鷹の聲が、シブライの耳を打ちました。

『これがオールブ王の王女、グウレルカ姫です。魔海の百合を護る魔法使です。枕の下に貝舟をしいてゐますから、顔を見ないで、素早くそれを抜き取りなさい。』

シブライは忍び寄つて、手を王女の枕の下に迂り込ませ、貝舟を掴んで引き出さうとして、ふと王女の顔を見てしまひました。とはつと投槍で貫かれたやうに、その神しさに打たれ、身體は立ちすくみ、たゞ茫然としてゐました。鷹は彼に飛びかゝつて、啄き立て啄き立てしまひましたが、彼はまだ眼を離さずにつつ立つてゐます。鷹はじれ猛つて高く叫びました。すると王女は眼を覺まし、半身をすつくと起して、周圍を見廻し、ばた／＼さわいで居る鷹を見附けると、身ふるひして面纱をかぶり、

『私は夢を見てゐるのかしら、それとも私をうかゞつてゐる人があるのかしら。』

とつぶやき、それから枕の下を調べて、貝舟にさはつた者があるのに氣附くと、慌てて臥床を降り、走つて鏡に向ひました。しかしその顔容の美しさは、少しも缺けず満月と映るを見て、ほつとしてにっこり笑ひ、

『きつと私をうかゞつてゐる人がある。でも夢かしら。』とつぶやき、氣にかゝるものか、着物を着更へ貝舟を持つて、侍女等の臥してゐる次の間を通つて、寶物のしまつてある穴倉へと急ぎます。シブライもその後を追ひました。

王女は中へはいつて、先づサマルカンドの外套が懸つてゐるべき場所へ行き、それが失せてゐるのを見ると、眞青になり、

『あつ、きつとうかゞつてゐる者がある！』と叫び、四方をじろ／＼見廻し、足早に外へ出て、番兵共が皆正體なく酔ひ潰れてゐるのを見ると、いよ／＼陰れ衣の外套と千人の盃とを使つて、悪だくみをした者があると覺りました。すると矢も楯もたまらず、「光の百合」の安否が氣使はれ、宮殿の階段を駆け下り、宮城の諸門を抜け、市街

を飛ぶやうに横切つて、海岸へ達すると、王女は手に持つた貝舟を海に放ちました。

王女は貝舟一ぱいに坐つて、衣裳を風にはらませると、貝舟は走り出しました。海岸まで追ひ縋つたシブライは、さつと水に飛び込み、間一髪のところ舟につかまる事に成功しました。そして白泡を立てて引かれて行きます。彼はサマルカンドの外套を着てゐますので、姿は見えませんでした。王女はさつとこの泡に眼をつけてゐました。舟は波を切つて進んで行きますと、行手に二つの岩礁が高く聳え、その間に航路は、たゞ一條にせばめられて、たゞさへ荒い波は、瀧津瀬とくだけてゐます。月は出ましたが、岩礁の間には入ると、水は紫色になり、薄青い大空の彼方に、二つ三つ大きな星が波にひたされさうに輝いてゐます。やがて海は名の如く幻影で充ちくつて、まほろしの船の帆が無數にきら／＼とひらめいたかと思ふと、忽ち消え、消えたかと思ふと、またプリズムの怪しい光のやうに現れ、なまぬるい潮の中を、おびただしい幻の人の影が、縞に飛白に萬華鏡のやうに流れてゐます。

十 魔の海の百合

貝舟は暫くはなめらかに^{すべ}に走るやうに走つてゐましたが、やがて縦に揺れ始め、波は青白い^{りんくわう}燐光をさらめかして、ものすごく渦巻き、雄吼びを上げて、ざんぶ／＼と打ちかけます。貝舟が一際大きな巨浪に乗つた時、思はずシブライの手は離れました。と舟も其の反動を受け、あつと云ふ間に顛覆し、滾り落つる水の下に没してしまひました。抛り出された王女の體も、危く波に吞まれようと思ひました時、シブライは右手に受け支へ、近くの渚の方へと引いて行きました。

岸は砂と貝殻ばかりで、色とり／＼の貝が月光に濡れてゐます。岸の上には直ぐ高い岩山が屹立してゐます。王女は自分を救けてくれた人が見えないので、岸に上るとすぐ駆け出し、岩山の岩に刻んだ段々を登り始めました。シブライも後に續いて、岩

山をぐる／＼廻るやうに登つて、程なく頂上に達しました。そこからは月下に照らされた、奇しき魔の海の全景が見渡されました。

さて王女は岩山の頂上に立つた時、自分の外に人の居ることを知つて、わざと足をすべらして見せました。シブライはあつと言つて駆け寄ると、彼女は聲のした方を向いて、ホッホホと笑ひ出しました。シブライはむつとして其の返報にと、バラビットの水を二十滴ばかりも、王女の周圍の岩にまいてやりました。すると、二十滴の水は二十の異つた聲となつて、四方からかまびすしく呼び立てましたので、王女は驚いて悲鳴を上げ、耳をふさいで、軽々と岩を越え崖を跳んで、小鳥のやうに逃げて行きます。シブライも後れじと、石や土塊を踏みしだき、木の枝草の根にすがつて、跡を追つて行き、遂に三方岩に取り圍まれ、一方だけ海に面して開けた、美しい凹地へ出ました。そこは一面に緑の芝草におほはれ、其の中央に、一本花咲いた百合が立つてゐました。莖は山國の初々しい乙女の背丈位、花はうるはしい佳人の思ひなやむさまに

重たげに頭をかしげてゐます。このまばゆいばかり神々しい天女のやうな花が、微風に揺られて立つてゐるさまを眺めた時、シブライは思はず歎賞の聲を上げずにはゐられませんでした。かうして彼に隙が出来た時、王女は聲する方に手を伸し、彼の陰れ衣を引つ掴み、べり／＼と力一ぱい裂いたので、シブライの姿は忽ち裂目から、王女の眼に映るやうになりました。

『まあ、貴郎はこんな果まで私を追つかけていらして、ほんたうに危い事でしたわ。これには深い仔細が御ありでございませう。』

といつて、王女はしつかり手を執つて、彼を百合の側につれて行き、花の雫を掌に受け、

『ではこれを飲みほして下さい。喉のかわきも一ぺんにとまります。』
とシブライの唇にさし付けてうながします。

シブライがこれを飲まうとした時、さつと一陣の風が吹き起り、王女の掌の雫を

吹き拂つてしまひました。彼が意外なことに驚いて眼を見張ると、それは今まで忘れてゐた、鷹の仕業でした。鷹は赤い眼を怒らして、彼の耳もとに叫びました。

『何をたはけた事を、それは毒藥です。さあ早く、その百合を根ごと抜いてしまひなさい。晩おそれてはだめです。』

シブライははつと氣附いて、走り寄りさま、百合を掴んで力まかせに引き抜きました。百合はぐらぐらして、根元から生血なまぢをほとほし迸らして抜け、見ればその球根は、人間の心臓のやうにびくびくしてゐます。

王女はこの恐しい有様に眼をおほひ、立ちすくんでしまひました。と同時に、その顔には、人間のあらゆるけがれた心——意地悪、貪慾どんよく、そねみ——が一呼吸毎に皺しわを刻んで、美しい面おもては見る／＼變つて行きます。と鷹は嘴くちばしを鳴らして彼女を三度啄つき岩の一端にとまつて、『カラッズ！』と一聲呼ひとこゑび立てました。

聲に應じて悪鬼カラッズは、猛鳥のやうに夜の空を斜はすざまに落して來て、鷹と王女

との間に突つ立ちました。

『カラッズ、こゝにお前の大好きなお姫様ひいさまがいらつしやる。何とあざやかなお姿でせうね。』

と鷹は叫び、悪鬼が王女のあさましく變つた姿に、むか／＼して、唇をゆがめて尻込みするのを見て、更に、

『仲よし同士が、都合よく出會つたものだね。』と面白さにあざ笑ひました。

悪鬼は鷹の手並を知つてゐるものか、かうあざけられても、挑戦てうせんせず、

『につくい女め！おれをだました魔女め！おぼえてをれ、今に闘たたかふ時は來るわい。』とうそぶいてゐます。

『よし／＼、いつでもお相手してあげるよ。……ではカラッズ、お前の好きなそのお姫様ひいさまをお連れして、オールブの王様に、婚禮のお許しを願ひに參つたがよからうよ。』と鷹は云つて、カラ／＼と笑ひました。

カラッズは、散々にからかはれ、今は問答無用と、オールブの王女を一掴みに掴んで地上を離れ、夜風をあほつて旋風のやうに翔け上り、ぐんぐん高く小さく飛んで、暫くは火の星のやうに、海波の上にその影を映してゐました。

悪鬼の影が見えなくなると、シブライは長い溜息をついて、自分に言ひました。

『あゝ、オールブの姫君は、醜くなつてしまはれた。そしてその顔は、私の許婚者のヌーアナと、全く同じやうであつた。彼女がヌーアナではなかつたかしら、——あのメリスタンの牧野で別れて以來の？ いや／＼私がこゝにゐたのに、扶けてくれとも何とも云はなかつた所を見ると、彼女ではない。ヌーアナは恩人だ。救はずに見て居る私でもない事は知つて居る筈だ。』かう獨り言をいつて、前の岩角を見る、鷹の姿は掻き消したやうに消えてゐます。いぶかしく思つて四邊を見廻すと、驚いたことは百合の植つてゐた地面の上に、一人の少女がすつくと立つて居ることでした。輝く白絹をまとひ、百合の莖よりも真直に、花よりもひとしほうるはしく、厚い黒睫毛の下



には、黒い眸が嵐の雲の端の星のやうに點じ、そして今新しく蘇生した人かのやうに、胸に、照る月の海原のうねりを打たせてゐます。シブライはしばし茫然と崇拜の眼を見張つて、これが天女ならば、風よ、迎への雲を吹き拂つてくれと願ふのでした。しばし彼は、眼に見る幻影の、消えもせんかと恐れるやうに、怖づ怖づとして立つてゐました。少女は涼しい眸をあげて、美しくほゝゑみながら言ひました。

『私は誰でございませうね。何人に似て居りますか。』

『あゝ、私にはわかりません。天上に住む仙女でいらつしやるかも知れません。貴女にくらぶれば、オールブの王女様の美しさも、物の數ではありません。しかし貴女のお聲は、私の許婚者のヌーアナに似て、もつと涼しく、もつと若々しく、もつと愛らしく響きます。』

少女はかき立てる琴のやうに高く笑つて、

『でも貴郎のヌーアナ様は、鬼神の爲めに一掴みにされて、大空へ舞ひ上る所を御覽

になつたではございせんか。』

『それは見は致しましたが、あれがヌーアナだとは判然わかりませんでした。それにあまり驚いたので、外道と争つて確める暇もありませんでした。』

『貴郎はそのヌーアナを、助ける思召でございましたか、それならば今私の爲めに、三度誓つて下さいませ。一番目の誓はバラビットの泉にかけ、二番目はガラヴェインの力にかけ、三番目は魔の海の百合にかけて……。』

シブライは戦きながら進みよつて、はづかしさうにそれ／＼誓ひを繰返しました。それが終ると、少女はシブライの手にすがつて、初めて立つて居た地面から、離れ得られたやうに歩み出て、さも嬉しさうに、

『アラーの神と、神の豫言者の御力によつて、ヌーアナは今こそ呪咀をのがれ、もとの姿を取りかへしました。』と叫び、驚きあきれてゐるシブライの方を見て言ひました。

『貴郎は御自分の許婚の女が、おわかりになりませんか。』

シブライは其の時まで、この少女がヌーアナであるかも知れないといふ望みと、又は疑ひとで、胸苦しい程の思ひをしてゐましたが、これが自分の許婚のヌーアナ・ピン・ヌーアカであるとわかり、餘りの嬉しさと驚きとの爲めに、彼女の前に倒れてしまひました。ヌーアナは彼を抱へ起して、

『私は、今になるやうな女ですと申上げた事は、眞實でございましたでせう。私は貴郎のお話の美人バナヴァーのやうな、他人様の命をあやめて、若返る女ではなく、かへつてこれまで、魔法の爲に容色をぬすまれて居たのでございます。』

と言へば、シブライは餘りの不思議さに、

『ヌーアナ、ヌーアナ、それは、どうして、また誰の爲めに？』と何もかも知りつくしてしまひたいやうに叫びました。

『その話は、アクリスへ參る途中でいたしませう。』とヌーアナは言つて、抜き取つた百合をシブライに持たせ、自分が先に立つて歩き出しました。シブライは嬉々として

後に従ひ、岩山を降りて、貝殻のきらめく海岸へと達しました。

海岸にちりるや、ヌーアナはざんぶと海へ飛び込み、泳ぎ始めましたので、彼も續いて泳ぎ出しましたが、やがて早い潮流に出逢ひ、二人の體は藁くづのやうに押し流され、彼は早くもアラアの御名を祈つてゐますと、一そら強い渦卷に、くるくると卷かれたかと思ふと、急に静な水面へと浮び上がることが出来ました。ヌーアナはと顧ると、彼女はけなげにも濡髪を後へ搔きのけながら、彼の近くに抜手を切つてゐます。『この海の中には、棗椰子に鈴なりになつてゐる木の實の數程も、不思議な事が澤山ありますが、今は一々お教へしてゐる暇はございません。でも私と一しよにかうしていらつしやれば、心強くはございません？』と彼女は呼びかけました。

『心強いばかりではありません。こんな楽しい事は今まで経験した事ありません。』かう二人は嬉しさうに、言葉を投げ合つたり、波上の笑顔に、笑顔を浮べて相答へたり、二人が胸に小波を打たせて、夢中に抜手を切つてゐますと、はるか彼方から、

紫と、緑と、燃え立つ眞紅との三色に照り輝く、大きな眞珠貝が、片貝を帆のやうに立て、風をはらんで走つて來ました。貝舟の正面には、銀作りの椅子が二つそなへ付けてあります。彼女はこれを見て、『あゝ、これはきつと、幻影の海の魔女ラベスクラットが、引出物に私に贈つてくれた物に違ひない。』と言ひながら、貝舟を引き寄せ、二人はその上に這ひ上り、竝んで銀の椅子に腰を下しました。すると貝舟は、風に吹き立つ海原の泡よりも軽く、ふはりふはりと宙に浮くやうにして走つて行きます。

さて二人が貝舟に乗つて、波上を走つてゐる時、ヌーアナは靜かに口を開きました。

『この美しい海のはてがアクリスです。海は靜かですから、風まかせで、舵はとらなくとも安全です。さあ、もし御望みでしたら、私の身の上話をいたしませうか。』

『えい、うかゞひますとも、こんな所でかうして、貴女のお話をうかゞへば、天國の音樂よりも妙に聽くことが出來ます。』

かうシブライがうながしたので、ヌーアナは語り出しました。

十一 ヌーアナの生ひ立

さる野原の中に、捨てられてか、行き倒れになつてか、一人の婦人が横つてゐました。その懐中には、いたいけな赤ん坊が抱れてゐました。婦人の體はもう冷くなつてゐましたが、赤ん坊は未だ元氣で、そひ寢の母の體の、最早冷くなつてゐたのも知らず、安らかな夢を見て、無邪氣な寢笑ひを續けてゐました。やがて、ひもじくなつて乳房をさぐり吸ひましたが、乳汁の出よう筈ありません。そこでむづかり泣き始めました。——この赤ん坊こそ、私が初めて此の世に現れた姿だつたのです。

やがて赤ん坊も、母の後を追つて死ぬよと見えました時、そこへ騎兵の一隊が野驅けして通りかゝつたのです。これもアラアの神の思召であつたのでせう。その隊長の胸に、例へば手頼なき者を哀む、詩人の一句のやうな慈悲心の一滴が、ポツリと落ち

たのでございませう。其人は赤ん坊を抱き取り、駱駝らくだの乳に水を割つて飲ませ、母の屍體なまがらをていねいに葬つて、そこを去つたのでございます。薔薇ばらは蕾ほらの時から、野咲のぎきか苑咲そのぎきか見分けがつくといひます。隊長はその赤ん坊を、由ある人の子だと信じて、幸ひ妻との間に子供もありませんでしたから、二人の間の子として育てることにいたしましたのでございます。

そこで私は、愛めでいつくしまれて小兒の時代を過し、隊長夫婦を眞まことの親とのみ思つて、なつき慕したつてゐました。と、ある日、表おもてで他の子供達と遊んでゐますと、オールプ王の姫君が馬に召されて、大勢御供をつれて通られました。姫君は私に眼がとまる

と、
『そこの捨て兒を呼べ。』と仰せられて、私を御側近く引き寄せ、じいつときつゝ顔をしてお眺めになつてゐられます。私は仰天して泣き聲も引つ込んで、たゞ慄ふるへてゐますと、やつと私を馬首ばしゆの横から取りおろさせられ、

『父は逃亡者だ。母は死んでしまつた。何でもお前のやうな者が怖こはからう。ホホホ、何の豫言なものか、あのうつけ者の外道のたは言である。』とつぶやいて、行過ぎてしまはれました。

私はそれからといふもの、姫君の言葉が氣になり、さみしい打ちしをれた子供となつてしまひました。するとそれが、恩人のラヴァロック様——それまで實父とばかり思つて居た、隊長様のお名前でございます。——その方にもわかつたと見えて、ある日私を膝の間に据ゑて、どうしてそんなに元氣がないのかと、聞いて下さいました。そこで私は、先きの一件のお話をしますと、隊長様はやさしく、

『それはその通りぢや。お前は實子ではない。だが實子同様にいとしいのぢや。それにしても、王女が何故又そんなに、お前を怖がるのであらう。いや、それは考へたくない、考へても詮せんない事ぢや。あの女は悪あくだくみの、世に二人とない魔法使ぢや。』
とかうおつしやられるのでございました。

このお話をききますと、私は一そう気がかりになり、すつかりいぢけた子供となつて、同じ年頃の子供と快活に遊ぶこともしなくなり、いつも隅すみつこに引つ込んで、ひたすらこの祕密を解かうと苦心しましたが、考へを凝こらせば凝こらす程、わからなくなるばかりでございました。

私は時々、オールブの王様が、私の實父でなからうかと空想し、わざ／＼行幸みちの途筋すぢに立つてゐたこともありまし、また遠國の王様や、貴族の方々のお通りのみぎり、よく御通路に立つて、もしや御召出しがあらうかと待つてゐましたが、そんな事は一度もございませんでした。たゞ私を可愛がつて下さる方は、ラヴァロック様ご夫婦ばかり、しかも大切な母様ははの方が、亡くなられてからは、目をかけて下さる方は、たつたお一人になつてしまひました。

この都の習はしで、子供は誕生たんじやうび日には、親達から色んな物をいたゞいて、楽しく其日を遊ぶこととなつてゐますが、私が十二回目の誕生日に——といつても、私の誕生日

はわからないものですから、拾はれた日が、その祝ひ日と決められてゐました。その日にラヴァロック様は私をお呼びになつて、ピカ／＼する金貨を一つ握らせ、好きな物を何なりと、市場へ行つて買つておいでとおほせられました。私は初めてのお金を早く使つて見たくてたまらず、暑い日中を構はず、黒ん坊の下男をつれて出かけました。町へは入つて、軒並に美々しく飾られた商店の列んだ方へ、急いで參らうとしてゐますと、ふと一人の年取つた乞食が眼にとまりました。黄色いきたない頭巾をかぶつて、ぼろ／＼の麻布あさのを身にまとひ、歩くことが出来るさへ不思議な位の、よぼ／＼の哀れな老人でした。その乞食が憐れみを乞ふて、私の前に立ちました時、私は可哀さうになつて、ぽた／＼と涙を流しました。黒人くろんぼがその乞食を追つ拂はうとするのを私は叱つて、たつた一つの手の中の金貨を、乞食にやつてしまひました。すると乞食は、其の返禮に何を差し上げませうかと云ひます。私は、お前のやうな哀れな年寄り、返禮などもらはうとは思はないと、笑つて言ひますと、乞食は考へ直して、

『ではお嬢さん、この金貨で、何を買はうと思つていらしたただかね。』と問ひます。私も子供のことで、正直にしばらく考へた後、

『あたし、金糸で縫取つた青い上衣と、金の冠と、珠入りの金の腕輪と、それから玩具も欲しいわ。それに、この町で魔術の本を賣つてゐたら、それも買つたかも知れないわ。』と言ひますと、年寄りの乞食は微笑してうなづき、其次に黒人に向つて、

『もし此の金貨が、お前のものだつたら、何を買ふかね。』ときゝました。黒人は乞食をばかにし、それに金貨が乞食の手に渡つたのに腹を立て、

『おれの背中位の大きさの膏藥と、駱駝の瘤でも買はうかい。……この惡黨め！ 聞いてどうする。』と罵りました。と乞食もむつとなつて、

『駱駝の瘤が欲しいとは、手前相當の望みだ。手前などに云つてきかせてもわかるまいが、恵みを受けた人間の、祈禱の力といふものは大層なものだぞ！ 俺はこの嬢さんの爲に祈つて、きつと願ひを叶へさせてあげる。そして、手前のその望みもだぞ。』

と言つて、跛を引いて行つてしまひました。

それから、市場を見物して歩いてゐるうちに、先の乞食のことなどは忘れてしまひ眼につくいろ／＼物が欲しくなりました。お菓子屋の前に來た時、檸檬菓子や麝香草子の、おいしい香が鼻を打ち、欲しくなつてたまりません。私は下男に向ひ、

『カドランプや、お錢が少しあると、大いばりで店へはいつて行つて、あのおいしいお菓子がいたゞけるのだがね。』と申しますと、カドランプはせゝら笑ひ、小い貨幣を自分の黒い手にのせて見せびらかし、なか／＼貸さうと云ひません。私はきつと、もう乞食などにはやらないと、堅く約束して、やつとそれを受取り、菓子屋の中へは入らうとしました。とまた一人の乞食が、憐れみを乞ひました。見ると前の乞食にも増して一そう可哀さうなので、下男との約束も忘れて、持つて居たお金をやつてしまひました。と、カドランプはこれを見て、ひどく腹を立て、その乞食を蹴り飛ばしました。乞食は蹶飛ばされて高く上り、不思議なことに、下へは落ちないで、そのまゝず

んずん昇ります。忽ち屋根を越え、町の向うの青空に溶け込むまで、どこまでも上つて行くのです。私もびつくりしましたが、カドラップの驚きやうつたらなく、乞食の消え去る方を眺め、またわが足をつくづく見入つて、その足指の強さにあきれ、家へ歸る途すがらも、天を見上げては、高く物を蹴上げるさまをして、わが足に、不思議の通力でも會得したかのやうな、滑稽な身振をし續けるのでした。

さて家に歸り、自分の部屋には入つて、一番に私の眼についた事は、金糸で縫取つた立派な青色の上衣や、可愛い金の冠や、寶石をちりばめた腕輪などが並べられてあつた事で、その上綺麗な手籠の中には、一ぱいいろ／＼な珍しい玩具が山と盛られ、まだその上に驚いたことは、赤い模様を表紙に金の釦金の附いた、大きな分のあつた本があつた事でした。私は有頂天になつて喜び、これはきつとあの乞食がくれた物に違ひないと思ひ、早速その上衣を着て、父に見せようと驅けて参りました。そしてふ



と窓から中庭を見ますと、一人の男が大聲を上げて、狂ひ廻つて居るのが見えます。見ると駱駝のやうに大きな瘤を背負ひ、其上に幅廣の膏藥かうやくをはり、ちやうど馬が乗り手を振り落さうとするやうに、跳ね廻つてゐるのでした。私はこれを見て、カドランプも申し出の瘤をもらつたなと覺りました。それにしても、あの乞食はきつと仙人に違ひないと考へ、そして父に今日あつた事をすつかり話すと、父は大そう私をほめて下さいました。

その後も、可哀さうにカドランプの瘤こぶは落ちず、近所の物笑ひとなりました。私はその後、一心に赤表紙の本を讀んで、魔法のかけ方、解き方などが出来るやうになり追々進んで、魔神を降伏させる法や、自在に鬼を呼出す術なども會得あくとくするやうになりました。私は、自分が魔法が出来るやうになつた事を、祕密にしてゐましたが、カドランプが餘りに可哀さうなので、彼のせがむがまゝに、一つの魔法を修しゆしてやりますと、瘤こぶはドサツと落ちて、地の中に埋うづまりました。これが私が實際に魔法を使つた、

最初だつたのです。私はこの事を堅く口どめしましたが、口輕い下男しもやの常と申しますか、彼が町中に振れ廻りましたので、いつしかオールの王女グウレルカ姫の耳には入ることになりました。

ある日王女から使が立つて、私に參上せよとのお傳へがありました。私は父に相談した上で、王女の許に上りますと、王女は下へも置かないやうに色々ともてなしをして下さつて、一つ二つ簡単な魔法をかけて、私の力を試されました。私はその度にそれを敗やぶつて、術に乗らなかつたので、王女は、これは案外出来るな——といふやうな顔をなさいました。それからは、一そうお愛想をよくして、私がお相手申し上げてゐることが、面白くてたまらないやうに、果ては私を抱きかゝへんばかりに親しく遊ばして、しかし其間にも、ちよいちよい隙すきをうかゞつて、妾をたぶらかさうとなさいました。夜が更けてから、妾を誘つて別室へは入られました。その部屋には、噴水が吹き上げ、周圍に澤山の寢椅子が置かれてゐます。そして向う側には、灯ともの付いた鳥檻とや

が見えます。王女が口笛を吹いて、合圖あひづをなさると、檻かごの鳥達は一せいに鳴き出し、妙なる音楽を奏し出しました。王女は私を近くに引き寄せて、この合奏を聴かせました。私には、しかしこの熱情のこもつた調べも、私の官能をとろかすことが出来ませんでした。私は音楽を聞いて居る振りをして、小鳥達を注意して見ますと、皆喉元のどもとに金の環形の印蹟あとかたがあつて、それが不思議にも、王女の人差指に眩まはゆく光つて居る指輪の形と同じでした。王女は私が魔法に屈しないので、邪険になつて氣味悪く笑つたり、又打つて變つて、撫でさするやうにやさしくなつたりなさるのでした。やがて侍女に何かおいしい御酒を持つて来るやうにと吩咐いひつけられ、王女と一しよに御酒をいたゞいてゐるうちに、つい心に緩ゆるみが出て、小鳥の歌を聞きながら、目を細くし夢現ゆめうつの境を辿るやうになりました。この時王女は、そつと拔足して席を離れて行くやうでしたが、私にはもうそれを、あやしみ警戒する力もありません。もうその時王女の術に捕はれてゐたのです。それからどう云ふ状態で、どれ程の時間が経つたかわかりません。妾の

前の棲木とまりぎにつながれて居た鳥——とても不思議な形をした、派手な羽毛を持つた鳥で夢現ゆめうつの間にも其鳥だけは私の眼瞼まぶたに焼附やけどいてゐました——それが突然合奏を破つて、けたましく笑ひ出しました。すると他の鳥も、その笑ひ聲に引入ひきこられて、一せいにどつと笑ひ出しましたので、私はびつくりして、はつと我にかへることが出来たのです。王女は怒つて上靴を脱ぎ、最初笑ひ出した鳥に、はつしと投げ、それから散々打うちやうやく擲して、『まだ、これでも笑ふか。』と叱りつけました。私はその鳥の不思議な笑ひ聲で、正氣にかへつたので、心中大いに感謝しながら、グウレルカ姫にかう云ひました。

『お姫様ひいさま、鳥の音楽もけつこうでございしますが、今の笑ひ聲の方が一そう不思議で御座います。』

賢い姫は、企たくらみかもう一步の所で破れ、今はもうそれまでと思はれたものか、

『ねえ、ヌーアナ、ほんたうのことを言ふと、私は今日お前の心をとろかさうとした

が、お前はなか／＼利巧だから、これから仲直りをして、二人力を合せることにしませうね。そして、私はお前をえらい魔術師に仕込んであげませう。』と申されました。『どうぞお教へ下さいませ。』と私も、しらばくれて答へました。

すると王女は、お前はどんな魔術が出来るか——海中に山を造つて、人を住はせることが出来るか。世界の人の視線を一人の男の頭に向けて、萬人を其足許に拜伏させることが出来るか。人を鳥の姿に變へる事が出来るか。魚を人間に變へる事が出来るか。——と云つたやうな、私が知らうともせず、考へた事もない、恐しい邪道の法を問はれます。

ねえ、シブライ様、私はこれまで魔法を使つても、それを悪用して、アラアの神の御意にそむくやうな事は、一度も致した事はございません。それで、そんな魔法は出来ませんと申し上げると、王女は、

『それではお前は、「光の百合」の番人が一番適して居やう、さあ、一しよにおいで。』とおつしやいました。

私はかね／＼その百合の事を聞いてゐましたので、では見せていたゞきませうと申しました。——シブライ様、今貴郎が持つていらつしやる其の百合のことでございます。——そこで王女は私をつれて、御殿をぬけ出で、海岸へ参り貝舟を浮べて、二人はそれに乗つて、魔の海を通つて百合の側へ参りました。私は百合が大へん氣に入りましたので、末の事や、王女に深いたくらみのあつた事も考へずに、百合の番人になる事を承諾してしまひました。

しばらくは何の異變も起らず、私は百合の花がいや増しに好きになり、一生懸命に番人の役をつとめ、どうやらグレルカ姫に對する反感も、薄れて行くやうな心持がいたしました。さて、ある夏の夕方のこと、父は椰子やしの樹蔭こかげに休んでゐましたし、私は大冊たいさつの魔術の本を繰つてゐました。そして「ア」の巻を読みさして、ふと見ますと、傾く夕日を受けて、芝の上に伸びた父の影法師が、伸びたり縮んだり、餌食えつきを追つか

ける暗夜の獸のやうに走り廻つたりしてゐます。「ア」の巻を讀んでゐる時、眼にとまつたものは、何かの豫告をなす。とありますから、私はこれは、何か異變の起る兆であらうと、その後心に注意を怠りませんでした。

其後果して數日經ちますと、オールプ國內に反亂が起りました。父は將軍になつてゐましたから、命を受けて討伐に向ひましたので、私も父に願つて、一しよに戰場につれて行つてもらふことにしました。終日激戦は續き、ある日父の率ゐる軍隊は、小川の邊りに陣することになりました。私は軍中の合言葉を使つて軍をぬけ、美しい小川をはさんだ、綠草の堤を下の方へと散歩し、冷い水に額をしめしなどし、ふと向ふ側を見ますと、一人の男が立つてゐます。よくよく見ると驚いたことに、それは先に魔法の本をくれた乞食でした。彼は向かう岸から、

『今夜異變の兆が現れます。』とたゞかう呼びかけたかと思ふと、あつといふ間に姿を消してしまひました。私はぜひ逢ひ度いと、色々と呪文を唱へて呼還さうとしました

が、不思議に利き目がありませんでした。それで大急ぎで陣に歸り、その夜は一睡もせず、父の天幕にひそんで、今か〜と事件の起るのを待つてゐました。すると眞夜中過ぎ、宿直の方から異様の氣配がして、拔身を持つた若者が、忍び足で近づいて來ます。いよ〜天幕の入口に來た時、私はつと行手に現れ、咒縛の術をほどこしてよく見ると、それは常に父が目をかけてやつてゐた若者ではありませんか。私が責め問ふままに、彼は涙を流し、ラヴァロック様を暗殺しようとはだてた事を白狀し、『こんな事を爲出かしましたのも、グウレルカ様にお氣に入りたいばかりで、王女様は私に、これを爲遂げたなら、王様に願つて、ラヴァロック様の後任にしてやるとおつしやいました。』と申します。

『貴郎はグウレルカ様に、心服していらしたのですか。』と私が訊ねますと、

『さうです。王女様に服従した果は、どうなるか心得てはゐますが、——王女様の氣の向くまゝに唄はせられ、笑ふ事を嚴禁されてゐる、彼等と同じ運命になるとは思つ

てゐても……』

この言葉で私は、ではあの鳥に見えたのは、皆人間であつたのか、實に残酷なことをなさるものだと身ぶるひしました。鳥にして見れば、鳥などに變へられてしまつた自分達と、同じ愚かな行ひをしようとして、新しく集つて來る者共を、棲木の上からじつと見て居たら、をかくして笑はずには居られないではありませんか。それを無理にこらへさせられてゐるとは、何といふ可哀さうな事でせう。

私は魔法を解いてやつて、若者に立ち去れと云ひますと、若者はしを／＼として立ち去りました。

さて、戦が程なく鎮定して、凱旋いたすことになりますと、國王は御殿を出て、父を御迎へ下さいました。私は國王に御目にかゝりたくなかつたので、廻り道して都へはいらうとしましたが、途中で道を失ひ、深い藪へ迷ひ込んで、日も暮れかゝりました。そこで私は、從者を四方にやり、路を捜させました。とその隙に、一人残つて居

た下男のカドラップが、なれ／＼しく私に言葉をかけ、不禮なことを申しますから、私は腹を立てて、うんとなぐりつけてやりました。と、彼奴は、馬のやうにいなゝいたかと思ふと、私を引つ摺んで天空へ翔け上り、旋風を立てて天上界までかけ登るよと見えましたが、忽ちはたとまゝり、今度は星斗爛たる上天より、眞つさかさまに落して、魔海の岸の洞窟へ這入りました。窟の中は燈火が煌々として、碧玉の柱に照り返り、御殿のやうに美しい帷帳がかゝつてゐます。私はそこへ着くと、直ぐ床の上に氣絶してしまひました。やがて正氣づいて見廻しますと、カドラップの姿は失せて、悪鬼が本性を現してゐました。私はこれがカラップであらうと直ぐ氣が附きました。『お嬢さん、こゝがこれから貴女の家ですから、安心して、氣樂にしてゐて下さい。』と鬼は言ひました。私は氣むづかしく、いつまでも黙つてゐてやりますと、鬼は私の機嫌をとつて、いろんなことを話しかけます。

『私には、心に心配事があつて、それどころではありません。』としをれて見せますと

『嬢さん、では貴女の心配事を伺はう。』と、鬼は案外おとなしく言ひます。私も氣を落着けて、やさしく、

『もし鬼神の大王様、私には命にかけても知り度い事が二つあります。一つは私のほんたうの父の行方で、も一つは私が何故野原に捨てられてゐたかです。この二つがわかるまでは、一刻も落着かず、こゝでのんきに暮してゐる氣にはなれません。』

『何の、それしきの事なら、たつた今教へて上げる。貴女も定めし、グウレルカの部屋、あの鳥屋を知つてゐよう、貴女の御親父のフェシナヴァットは、あの中にある鳥の一羽ぢや。』

私は仰天しましたが、思ひあたる節もありましたので、その魔法はどうすれば解けるかときゝますと、割合に單純な鬼は、私をもう少しも疑はず、自分の頭にある、威力廣大な魔の毛を見せてくれました。——今シヤグバットの頭にあるそれでございます。それから鬼は、ますく心をやめるめ、大いばりで、いろくくと打明け話を始めました。

『なあ、ヌーアナ、おれは外道の中でも、すぐれた通力の所有者だが、あの魔法使のグウレルカだけには敵はない。それは彼奴めが一個の指輪を持つてゐるからだ。あの指輪さへせしめたら、人間の奴隷などにはなつて居ぬ。世界を一蕪にして人間共を滅してくれるのだが。』

あゝ、その指輪なら、見た事がある。——と私が心に考へてゐますと、鬼は更に、『貴女の父親を救ひ出すについては、おれはたゞ、魔法を解く手段だけしか教へてあげられない。それは鳥共を、一時間續けさまに笑はせることだ。すると皆人間にかへつて、轉げ廻つて大笑ひする。しかしどう云ふ理由でさうなるのかは、おれにはわからない。』

『では私を、早くオールブへ還して下さう。』

すると鬼は、私を掴んで空中高く翔り、たちまちのうちに、養父の家の屋根の上に

着き、私を降して行つてしまひました。

あゝ私はそれから、どんなにか父を魔法から救はうと、毎日魔書を研究したことでせう。しかし、グウレルカ姫の通力が偉大で、なかなか太刀打が出来ません。或時は鳥屋へ忍び入つて、面白い人間の話を聞かせ、一時間近くも鳥達を笑はせ、も少しで解けかゝつた處へ、王女は走つて来て、怪猫のやうにてら／＼光る眼で鳥達をにらんで打擲し、殺さんばかりに苦しめました。王女はそれから私を疑ひ、私もあくまで挑戦しようと決心致しました。それは私の願は清淨無垢で、きつとアラアの神のお助けがあると、信じたからでございます。

ある日私が、海の方に開いた窓から、庭を眺めて居ますと、毛なみ珍しい鳥が、庭の佛手柑の樹に飛んで來ました。よく見ると、嘴に一個の指輪を含んで居ます。そして鳴き出しましたが、一聲毎に指輪が落ちるのを、箭よりも早く飛び降りては、指輪

が地に落ちないうちに啄み取ります。これを幾度でも繰返すのを見て、私はこの鳥は、魔に魅せられてもがいて居る可哀さうな人に似てゐる、指輪を捨ててゆつくり歌ふことも出來ず、それかといつて、指輪を捨てないやうにと、歌ふことをこらへてゐることも出來ないのだと、かう思ひながら其鳥をじつと見つめて居ますと、さつと一本の箭が飛んで来て、其の鳥の翼を縫ひました。と鳥はばた／＼とよろけ飛んで、指輪と共に私の懷中に落ちました。そして悲しく微かに泣いたかと思ふと、もう眸に膜がはり、冷くなつてしまひました。私は指輪を手につけて見てびつくりしました。それはグウレルカ姫の嵌めて居たものと、寸分違はないではありませんか。これはきつと王女の鳥屋の鳥の一羽が、指輪を盗んで逃出して來たものだと思ひ、私は狂氣する程喜び、そして、はかなくも死を以て大きな手柄を立ててくれた、その鳥の亡きがらを、涙と共に葬つてやりました。

それから私は懸命に、その指輪に就いて魔法の本を研究しましたところ、とても大

變な事を發見しました。まあ聞いて下さい。その指輪の持主こそは、幾千萬の人間が磁石に吸ひ附けられたやうに、寄つてたかつて渴仰して居る、あの「魔毛」の主人公だと書いてあるのでございます。それでこそ、鬼神カラッズもグウレルカ王女に敵對することが出来なく、王女の鳥屋には鳥が充滿し、私のあらゆる方術が効なかつたのも、皆この指輪の力であつたのでございます。

さて私が、夢中になつて魔法の本を讀んでゐますと、突然、

『ヌーアナ、ヌーアナ！』と云ふ叫び聲が聞えて、王女が髪を振り亂し、怖しい劍幕で飛込んでおいでになり、私が本を閉ぢる暇もなく、其の中に指輪の事が書かれてゐるのを見られると、指輪がすでに私の手中にをさまつたことを見ぬき、忽ち私との間に眞劍の戦が始まりました。王女は凄しい形相をしてこちらをにらみつけ、電光石火姿を變じて、蝮となり、蝎となり、或は蜥蜴と變じ、獅子とかはつて私を襲ひます。私は敵の變身の都度、猛火の輪と、魔水の渦を作つて、其中にをどり込んでその難をさ

けました。

王女が十五度目の變身に、疲れ切つて、床に倒れたのを見ますと、私はそつと身をかはして、鳥部屋に驅け附け、滑稽話を一つ、早口に致しますと、鳥共は身體を揺つてどつと笑ひ出しました。私が再び取つて返した時には、王女は未だ床の上にあへいだまゝで、どんな約束でもするから、指輪だけは返してくれと、哀願なさるのでした。それから、最後に氣狂のやうに笑つて、かう云はれるのでした。

『ねえ、ヌーアナや、よく考へてお見。容色をなくしてしまつて、指輪が何になる。お前の容色は、私の手に握られて居るのですよ。』

私は此の一言で心の底まで打ち抜かれ、その理由を王女にたづねました。と王女はくはしく説明して、

『さうともさうとも、お前はみにくい婆さんになつて、お前の美しさまで私に加はるのだよ。』と嘲笑ふのです。私はかう云ふ祕密のあつた事を聞かされて、も少しのこと

で指輪を返すところでした。

其時、大笑ひの渦が、地響のやうに傳はつて來たかと思ふと、鳥の大群が笑ひの颯風を起して突進して來て、私が窓を開く間おそしと、どつと笑ひと羽搏きの歡聲を上げて、部屋に雪崩れ込みました。私も釣り込まれて笑ひ出す。指輪を失つた王女も、轉げ廻つて笑ひ出すして、少しは一同が、呼吸もつけず、死ぬかと思ふばかりに腹を絞つて笑ひ續けました。するとこれを聞きつけて、オールブの街中、上は國王から、市民奴隸に至るまで、理由も解らず聲一ぱいに笑ひぬきました。それで今も此の日を「笑ひの日」と申し傳へられて居る位でございます。

やがて、笑ふだけ笑つてしまふと、部屋の中は、一ぱいの男の人達となりました。王子もあれば將軍もあり、若者もあれば老人もあり、雑多な階級の人々で、みんな笑ひ落して人間となると、恥しさうなむつとりした顔をしてゐました。

私は此時王女に、

『さあ、此の方々の中に私の父が居られる筈です。お云ひなさい。』

と言ひますと、彼女の言葉も待たず、私の名を呼びながら、進み出られた方がございました。その人が私の實の父フェシナヴァットでした。父は黒子の位置で私を實子と知り、母の物語をしてくれました。母は旅の途すがら、隊商からはぐれて、沙漠で迷ひ子になつたのを、父が捜して居るうちに、盜賊に襲はれて父は捕虜となり、そのまゝ引いて行かれたのだと語りましたが、彼女を怖れてか、彼女の魔術にかゝつた事に就いてだけは、少しも觸れませんでした。私も今彼女の怒りを買ひ度くなかつたので、強ひてはたづねず、二人はしばし抱き合つて、涙を流して喜びました。彼女は、このさまを見るに堪へかねてか、いつの間にか姿をかき消してゐました。

私は指輪を取り出し、其の威力でカラッズを呼び出して、部屋に滿ち滿ちた人々をいづれも其の故郷や國々に送り歸らせ、もとの地位や官職にかへすやう命じました。其時の人々の感謝の言葉程、私に美しく響いたものはございませんでした。

私の仕事はこれで一段落つきました。鬼のカラッズも命令をはたして、勇んで歸つて來ました。それからカラッズは、得意になつて、今後の怖しい計畫を語り出します。それは人間をみな殺しにするか、殺さないまでも、奴隷や荷馬にしてやるのだ。——といふ大それたたくらみです。彼はかう云ふのでした。

『指輪はお前が持つて居り、おれには魔毛がある。魔毛さへ持つて居れば、人間の奴等はおれをさらつてゐても、おれに吸ひ寄せられて、寄つてたかつて崇めずにはゐられないのだからなあ。』

私は其時、さぐるやうに聞いて見ました。『ねえ、其の魔毛は、貴下でない方の頭に生えても、やはり指輪を持つてゐる私の力に従ふのですか。』

『さうは行かないさ。他人の頭にあれば、指輪に逆つて、其時は指輪は無力だ。』

『でも他人の頭に移す事も出來ますのね。』

『他人が持つてば、それこそ身を破る元だ。』

こゝまで聞いて私は、カラッズの赤い尖つた耳に、『お休み、お休み』とささやいて守り唄を歌つてやりますと、彼は仕事の疲れで、すやくと眠り出しました。私は父を呼んで、魔書を取つてもらひ、指輪の力で魔毛を見附け出す方法を調べ上げました。私は一本の毛筋で指輪をつるし、外道の頭に垂れますと、彼の頭髮の中の一本の細毛が苦しみ出し、アイロンをあてられたやうに、縮んで波打つたり、蛇のやうに縊れたり曲つたりして、ぴか／＼と光ります。私はすばやく指輪を指にはめ、それに細毛をぐる／＼巻いて、ぐいと引き抜きました。と耳をつんざくやうな大きな音がして其の毛が抜けて來ました。

ああ、シブライ様。其時のカラッズの憤怒と叫喚つたらごさいませんでした。爲めにオールプ全市は震撼しました。次の瞬間、私は天空を逃げかけり、外道は追つて、電光のやうに走ります。脚下の大海は狂つたやうに泡立ち、追ひつ追はれつ、二人は大空をさり／＼舞ひして翔け廻りました。そのうちに、魔毛は私の手の中でさり／＼縊

、れては蛭のやうに血肉を刺し出します。私はもうこれまでと、其の時ちやうど沙漠を越えて、一つの都會の上に来て居ましたので、神を念じて、バツと其の毛を地上に投げつけました。それが、大運の降つて來るのも知らず、ちやうど店先に坐つてゐた、シャグバツトといふ呉服屋の主人の頭に落ちたのであります。其の魔毛の靈驗は眞に觀面で、今は其の都は、此の主人の名で世に通つて居る程であります。

私がシャグバツトの頭に、魔毛を植ゑ付けた爲に、世の中に迷妄を生ぜしめることになりましたが、あゝ天命の不思議さ！ アラーの神の御意はほむべきかな！ その爲に私は、カラッズから逃れて、シブライ様、貴郎にお避ひする事が出來たのでございます。カラッズはも早、魔毛を取りもどすことは出來ないと斷念し、其時は逃げ出しましたが、それ以後、彼は意地悪い奴隷として、ずっと私に使はれて來ましたが、メリスタンの牧野で、貴郎がガラヴェインに騎つて亂行を遊ばすのを、お救ひする爲めに放してしまひましたので、今はもう指輪の力の及ばない所に遁れて居ります。

又其時の私の大難は、私が百合の番人になつてゐた事でございました。百合とその番をする私とは、互ひに感應し合ふので、一方がけがされると他方の美しさも、凋んでしまふのでございます。グウレルカ女王は、復讐の爲めに、百合の花弁に毒汁をそそいで、私の容色を、自分のものに奪つてしまひました。ですから私は、貴郎とお逢ひした時、あんな姿だつたのでございます。あゝ、でも、もとの姿にかへれた今の嬉しさ！ あゝ貴郎は現在の私を、何と思つて下さいます！ いえくみにくかつた事も無駄ではございませんでした。私はその爲め、謙遜するやうになり、謙遜するやうになつてから、幾分賢くなつたと存じます。それから私は、指輪の力で、フェシナヴァツトを宰相の位に上らせ、シャグバツトを剃る方を、動かない運命のやうに待ち續けて居たのでございます。おゝシブライ様、これから魔毛を首尾よく剃り取つた上は、その毛を聖界アクリスに植ゑ付けて、それを柱のやうに太らせて、アクリスの威嚴を増させるとは、豫言の書に見えて居るのでございます。

十二 魔海の女王

ヌーアナの話は終わりました。シブライにとつては、それは美しい面白い音楽が、はたと途切れた程にも名残をしいものでした。貝舟は月夜の海を進んで行きます。彼女は突然言ひました。

『山の頂の火を御覧なさい。』

見れば、前方の高い山の頂に、大きな灯がついてゐます。

『あれがアクリスでございます。客が近づくのをさとして、迎ひ灯がとぼされたのです。さあ、あの山へ登る用意をなさいませ。ガラヴィンの毛を手に巻き、バラピットの水でお口をしめして、百合の花を差し出して持ち、……あゝそれでよろしい、邪魔除の三つの護りが揃つたのですから、あとは貴郎の努力次第ですよ。』

だん／＼と近づくに従つて、山上の火は赤々と照り返り、海上は火の子の渦巻のやうに見えました。しかし月は曇り始め、波は次第に高く、何となく不気味さが感ぜられました。此の時、舟は幾うねりもの大波を、一つに重ねたやうな高波の頂に持ち上げられました。ふと下をのぞくと驚いたことに、真紅な水底に、長さは沙漠をうねる大隊商の列よりも長い、全身燃え立つ鱗におほはれた、一つ眼の怪魚が、大口を開けて待ち設けてゐました。ヌーアナはあわただしく、

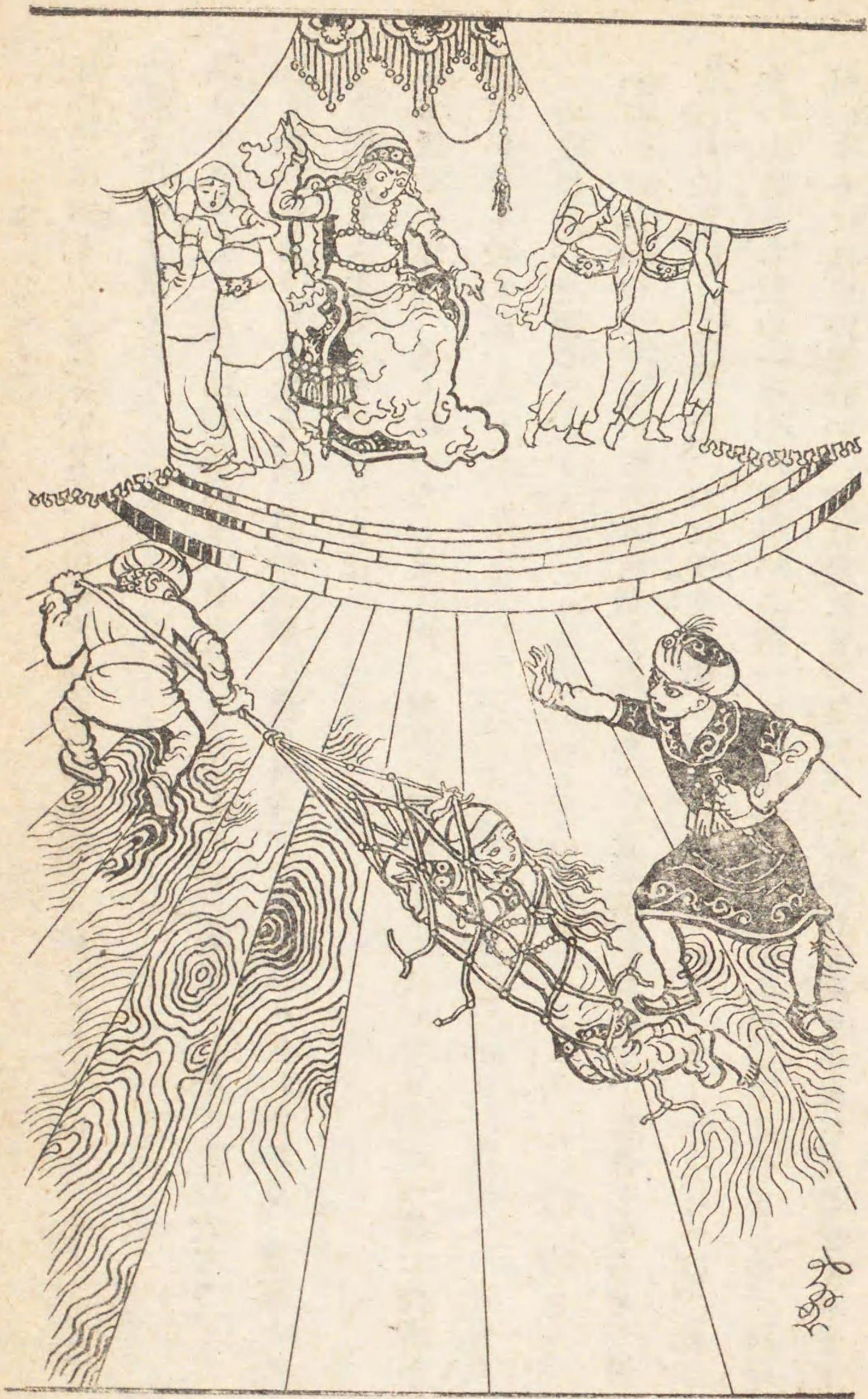
『カラッズの奴！』と叫んで、つと立ち上り、舟が波底に落ちるよりも早く、呪文を唱へますと、貝舟は二人を押し附けるやうにして、はつたと蓋を閉ぢ、四つの瞳に眞暗闇が落ちて來ました。かうして居ますと、間もなく二人は貝舟もろとも、何物かに一口に吞まれたやうな氣持がし、深い所へ沈んで行く、いやな夢を見て居るやうに、ぐん／＼恐しい速度で、何れかへ運ばれて行きます。すると突然、どしんと大きな震動が起り、貝の中が赫と明るくなつて、進行がびつたり止りました。これは貝舟が何

者かに、一撃のもとに粉碎せられたのだなと思ふ途端、眼もくらむばかりの色々の光に射すくめられました。しばらくしてやつと眼がなれると、それは無数のランプや、蠟燭の光や、ちびたゞしい珠玉の光や、それ等を照り返す立てつらねた鏡の光で、又そこ、からは、若々しい美人の澤山の瞳が、澄んだ光、燃え立つ光を二人の方に送つてゐます。

ずつと向ふには、一人の美しい女王が、寶玉の冠をいたゞき、琥珀色の衣に白絹の袴を着け、サフラン色の珠の鞋をはき、いとも悠然と、珊瑚の椅子にかけてゐます。彼女は満身裝飾の珠玉にうづまり、呼吸をする度にも、さら／＼とそれらが光りふるふるさくらびやかさは、手をかざさなければ、打ち揚げない程の有様でした。

『これ、わが領する海を旅する人達、其方達に會はれたのも、みなカラッズのお蔭ぢや。』とその女王はおほせられます。ヌーアナは泰然と、

『左様でございます。ラベスクラット様。しかし、私共は急いでアクリスへ參る者で



遅れては困るのでございます。山の火は先程から燃えて居ます程に。』

女王は聲を荒らげて、

『ヌーアナ！ 其方は利巧にも、貝を閉すことを心得てゐて、仕合であつたなう。しかし此所へ寄り路したとて、妾の宮殿を通つても、アクリスへは行かれる。幾萬といふ人間がこゝを通るではないか。』

『おほせの通り、通りはいたしますが、幾萬の人間のうちに、アクリスへ達した者がございましたか。』

女王はかつと怒つて、

『わが身に向つて、そのやうな言葉を返すか！ 其方達を助けて、百合を取らせた恩を忘れたか。』かう叫んで、口に呪文を唱へて、一聲『アバラック！』と呼ばば、並び立つた碧玉の柱の一つが、ぎいつと開いて、中から駝背の小男が現はれました。脚は弓のやうに曲つた蟹股で、腕は足にまで達してゐる、奇妙な網を手にしてゐます。女王

がヌーアナを指すと、さつと網をヌーアナの肩へ投げ、引き倒しさま柱の方へ引いて行きます。シブライは天地が暗闇になつた程にも驚き、小男にをどりかゝらうとする、ヌーアナは早口に、

『貴郎はお護りの力で、此所の誰よりも強いのですが、唯、アバラックだけにはかなひません。……心變りをせず、たゞ七番目の柱をおぼえてゐて下さい。』かう言ふのを聞いたかと思ふと、彼も又、アバラックが下す一撃に、女王の脚下に打倒されてしまひました。

彼が正氣にかへつた時、怪しくも美しい樂の音が、どこからともなく流れて来て、身も魂も溶けてしまひさうに思はれます。彼は脳はぼうつとして氣はけだるく、まるで時間に始めもなく終りもなく、浮世の心配も何も忘れ果てたかのやうであります。やがてすべてを魅するやうな音楽も、あらゆる諧調を調べつくしたかのやうに、はたと止みました。と、自分の呼吸もとまつたかのやうに感じて、眼を見張れば、前の庭に

葡萄、石榴、榲桲など色とりどりの美しい果物が、つや／＼した頬をかけ列べ、大枝小枝には、無数のランプの灯が、夢のやうに廣い苑を照してゐます。さて自分とは顧ると、王者のやうに、紫の褥の山にもたれ、曉の雲かとまがふ琥珀色の絹布に包まれてゐます。彼は飛び起きて、自分の記憶を喚び起さうとしました。自分は一體これまでどんな冒険をして、どんな災難に遭つてきたか、又今眼の前のこの仰山な光景は何であるか、いや／＼自分は誰であるかさへ、彼には朦朧として、あたかも強烈な忘却の魔酒を飲まされたかのやうでした。ましてヌーアナの名さへ忘れ、自分はさて何をしてよいか、何を望んでよいか、一切が夢中で、よろ／＼と立ち上りました。と突然目の前に美しい少女がしづ／＼と現れ、こちらへといふやうな身振りをして、先に立ちます。シブライは園の中を導かれて歩き出しました。

やがて、向うの緑の丘の上に、玉座が設けられてゐるのが見えて來ます。よく見ると、玉座の上には、美しく着飾つた一人の女王が、いたゞく冠から、くづれる黒髪を

うしろに波打たせて、悠然とかけかけてゐました。女王は、彼が近づくのを見ると、月のやうにかゞやく面に、こぼれんばかりの愛嬌をたゞへて、涼しい聲でよびかけました。

『あゝ、もしシブライ様、御大儀の御道中、まださきも長うございます程に、こゝでしばらく、骨休めしていらつしやいませんか。』

彼は、あつけにとられて、はておれは何處へ來たんだらう、この女王は誰だらうともかくやうに、記憶のいとぐちを掴まうとあせりましたが、だめでした。それで、彼はいはれるまゝに、女王の前の椅子にかけて、色々と手厚い饗應をうけて、しばらくは酔ひしれた人のやうになつてゐましたが、彼の胸のうちの、大勇猛心は、全く死にはしなかつたものと見えて、熱病の中の夢のやうに、ちらり／＼と、切れぎれの記憶が蘇つて來ます。そして彼がやつと、いくらか思ひ出したと思ふと、女王はすかさず、甘い言葉をなげつけます。すると、また何かをふはりとかぶせられたやうに、一

切がぼやけてしまひます。

彼は勇猛心をふるひ起して、やつと、切れぎれに飛ぶ記憶の一片をとらへて、女王にかう聞いて見ました。

『世の中に、シャグバットといふ者がゐますか。』

『さあ、さういふ名の人もございましたさうですよ。世界中の人々が、その人の敵味方になつて、大騒動を起した話もございます。』

『して、そのシャグバットの頭はもう剃られましたか。』

『もう綺麗に剃られましたでございます。』

『何といふ豪傑がそれをし遂せたのです。』

すると、ホッホホと女王は仰山な聲で笑つて、

『まあ、人が悪い、知らない振りをして。貴郎御自身が、手を下されたのではございませんか。』

『うむ、どうもそんな氣もしますが、……さうく、そのシャグバットの住んでゐる都の宰相に、一人の娘があつたでせう。』

『そんな女は、少しも存じません。』

と女王はつんとします。

と此時、シブライは、自分が以前に、とても痛い目にあつた事を、ぼんやりと思ひ出し、次にそれは、さうく蛇鳴きして、肉に喰ひ込むやうに痛い、咎で打たれたのだといふことを思ひ出し、あればつかりは夢ではなかつたと思ふと、ほんのぼつたり確かな記憶が蘇つて來ました。諺にも『覺えさすには鞭打つにかぎる。忘れさせないこれが良薬。』といふ事がありますが、彼に第一番に笞刑の試煉を経させて置いたのは、ヌーアナの賢いところでした。彼はぼんやりではあるが、つぎく記憶を喚び起し、自分が三つの護符——中でもバラピットの水を持つてゐる事を思ひ出し、それをどうして手に入れたか、何の目的に使ふものか、まだはつきりはしませんが、ただ

言葉云はせて見る事が出来ることだけは、わかつて來ました。そこで彼は、酔つぱらひがお調子に乗つて、自慢さうに手品でも使ふやうな氣持で、

『こゝにこんな花と、懷中にこんな瓶とがあるが、どうして私の手に入つたか、今は思ひ出せませんが、これで一つ不思議の技を見せてあげませう。私の魔術のあざやかな事を見れば、私もたゞ人でない事がわかるでせう。』

かう得意げに叫ぶと、女王は急にあわてて、

『いえ、もう澤山！ 私は不思議などには飽いて居ります。』

と恐い顔をし、彼にさうはさせまじと、しがみ附かうとすれば、彼は面白さうに、まだよろ／＼として、瓶の口を開けようとしませう。女王はいらつて、『アレ！』と叫べば、近侍の者は折り重なつて、シブライの手を抑へようとなりましたが、もう此の時、一滴の水が、百合の花心に落ちてゐました。女王は周章狼狽、第一の家來のアブラックを差し招きましたが、もう後の祭、花心に聲あつて、

『七番目の柱をおぼえてゐて下さい。』と呼びます。其の聲は正しくヌーアナの聲であります。彼はぴりつと電氣に打たれたやうに感じ、更に眉と額をしかめて、しきりに記憶を呼び寄せました。と、ヌーアナのこと、カラッズのこと、それから、ラベスクラット女王の許に來て、アブラックに打ち倒された事まで思ひ出して、さても怖しやまことにラベスクラットの面を見た者は、過去の記憶を喪失して、彼女にたぶらかされるといふが……あゝ、自分はいかに居られない、しかし、ヌーアナの言ふ第七番目の柱とはどれか、そして今後の處置をどうすればよいか——と考へました。それには自分は三つの護符を持つてゐるが、先づこの力にたよるよりほかはないと考へ、先づ第一に敵を利用し、女王に何も彼も白状させて見ることにだつと、彼は瓶をしまふ振りをして、その一たらしをこつそり女王の杯に落しました。

バラピットの水のお蔭で、やつと頰勢を挽回した彼は、いくらか落着いて、にこやかに女王に向つてかう言ひました。

『私はとんだいたづらをしました。幾重にもお詫びします。女王様も機嫌を直して、一しよに乾杯かんぱいして下さいませんか。』

すると女王も喜んで、盃を取り上げ、一息に呑みほしました。すると忽ち効験かうけんが現れ、彼女の眼は光り出し、口は締しまりがなく、笑ひ上戸じやうこの酔ひどれのやうに、魔法を使ふどころでなく、心の中に抑へてゐた事を、べらべらとしやべり出しました。

『おゝ、アバラックのちよび助さん、お前はまあ、よくも長い間、私の奴隷となつて働いておくれたたね。この醜男ぶなとこの蟹股かにまたさん。それからもうし、シブライ・バガラックどやらの、床屋なひの甥あなづたんの青瓢箪あおべうたん、お前もこれから奴隷になるのですよ。なあ、アバラック一寸法師いっすんほふしのおばかさん。これまで私がちやほやしてあげたが、あれは皆、手強てごほい奴を縛しばる手さ。……あゝ酔ひました、酔ひました。強いお酒みきをさゆつとやつたので、しやべりますとも、しやべりますとも、シャグバットはなるほど危い。彼の頭が剃られるものなら、それこそ大變なことになる。それで床屋なひの甥御なひごをたぶらかすのは私の役目

よ。きつとシャグバットを救つて見せます。』

かうまで打ちまげられると、シブライはすつかりはつきりして、自分の大事業を忘れてゐた事を後悔し、

『あゝ、あれはだらしがない。三つの護符おまもりを持ちながら、こんな魔性の女にたぶらかされて、これではアラの神にも、ヌーアナにもすまない。さあ今度こそは、七番目の柱をたどつて、アクリスへ一目散、早く事業の劍を手に入れねばならぬ！』

かう考へて眼を上げると、罵ののられたアバラックも、憤怒ふんぬの形相かたちさまざま、シブライに同意を求めるやうに、

『ねえ、君、今わしの事を、小人島とばかにし、醜男ぶなとこと嘲笑あざわらつた女王こそ、奇怪至極ぢやありませんか。』

シブライは、彼を、自分より先に此所に來て、犠牲ぎせいになつた男だと、初めてわかつて氣の毒になり、